



2014年度

中央大学ボランティアセンター報告書



2014年度 中央大学 ボランティアセンター報告書

【巻頭】 学生たちのボランティア活動



【巻頭】 学生たちのボランティア活動



被災地支援ボランティアで得る 生きた学び

法学部法律学科2年 手塚 文裕

被災地支援学生団体 はまらいんや 代表

大学ではじめて被災地支援ボランティアは、私に多くの学びを与えてくれています。

私が被災地支援ボランティアを大学で始めようと思ったきっかけは、ボランティア説明会に参加したことでした。私はもともと、生まれが宮城県仙台市です。小学6年生まで仙台で暮らしており、祖父母も同居していました。東日本大震災があった日は、祖父母や小学校時代の友人の安否を確認しつつ、落ち着かない1日を過ごしました。報道では、仙台にいた頃の記憶にある場所のいくつか、変わり果てた姿で映し出されました。自分も何か復興のために手伝いたいと思いつつも、あまりの被害の大きさと、当時高校1年生だったことから、初動期の被災地に行くのが躊躇われ、結局現地には行きませんでした。

2013年4月、大学に入学し「被災地支援ボランティア」の説明会に参加しました。説明会では、様々な団体が活動紹介を行っていました。それらを見ているうちに、自分も高校のときにやらなかったことを大学生活の中で再びやってみたいという思いが湧き、ボランティアをはじめめることにしました。

活動に参加して2年間、逆境の中で日々を懸命に生きられている被災地の方々に寄り添わせていただきました。仮設住宅に住む方々の暮らしの中に少しずつ入らせていただく過程で、私は被災された方々の生活再建に大きく関係する生活保障や社会保障について興味を持ち、また、ボランティアでお世話になった先輩方の影響もあり、今は行政官として将来仕事がしたいと考えています。被災地支援ボランティアは、自分のキャリアデザインにおいても、大きな影響を与えてくれました。

ボランティア活動では、実際に被災した地域に足を運び続け、そこに暮らす人々と関わり続けることで本当に多くの学びを得ました。活動を通して実社会での課題を目の当たりにし、大学の中にいるだけでは学ぶことのできない生きた学びができたことは、自分にとって大きな財産です。残りの大学生活でも活動を継続し、微力ながらも被災地の方々の力になり続けられたらと思います。



【巻頭】 学生たちのボランティア活動



傾聴の大切さに気づかせてくれた ボランティア

法学部政治学科2年 佐藤 耕太

被災地支援学生団体 はまぎくのつぼみ 代表

今までの人生で、野球部の部長、体育大会の応援団長、ボランティア団体の代表、など様々な代表職を経験してきました。代表という立場上、人前で発言をする機会に恵まれていたため、意見を述べるのに特に苦勞はしませんでした。むしろ発言するのがとても好きになりました。しかし、その反面、私は人の話を聞くのが下手なのです。人の話を聞くのが不得手な代表はいかなるものかと思いますが、実際にそうでした。



被災地に初めて行って現地の方々と交流した時、私は困り果てました。被災した方々に対して、素人の大学生が出来るアドバイスなんて一つもないのです。意見を言うしか術のない私は、あまり長く話を続けることができませんでした。活動が終わり東京に戻ってから、急いで傾聴の本を読みました。傾聴の基本は相手に質問を投げかけることです。無理に自分の意見を述べようとしなくていいのです。というのも人によって物事に対する見方は異なるので、自分の意見が他人にあてはまることはまれだからです。また、質問をしようとする姿勢は、相手の意見を注意深く聞くことにつながります。他にも、傾聴にはオウム返しなど様々なスキルがあります。

自分の将来のために、ボランティアを通してスキルを磨くのは本末転倒だと思います。なぜなら、ボランティアはその活動の対象者の方々を第一に考えて行われるべきだからです。ただ、会話を通して、被災した方々に少しでも楽な気持ちになっていただきたいという一心で学び始めた「傾聴」という姿勢が、私にとってプラスになっていることは確かです。

私の周りには、私の話や悩みを真摯に受け止めてくれる仲間がたくさんいます。だからこそ、こんな私でも今までなんとか楽しく過ごすことができました。今度は、仲間にとって、私がそういった存在になりたいです。ボランティア活動はもちろん、普段の生活でも、自分の意見を押し付けるのではなく、相手の話を真正面から受け止めることができる人に私はなりたいです。

【巻頭】 学生たちのボランティア活動



大学生だからこそできる ボランティアを探して

法学部法律学科2年 黒川 涼香

ボランティアセンター学生スタッフ チーム女川 代表

宮城県牡鹿郡女川町を初めて訪問したのは、2013年5月に行われたボランティアセンター主催の「被災地スタディーツアー」であった。祖父母が阪神淡路大震災の被害を大きく受けた兵庫県に住んでいることもあり、初めは自らの目で被災地を見て学びたいという思いが強く、訪れた先で見たものは以前どんな町であったのか思い描けないほどの風景だった。そんな中、外から来た私たちに対して現地の方々があ



たたかく迎えてくださり、その気持ちがとても嬉しく、少しでも何かお礼がしたいという思いから活動へとつながっていった。

初めての訪問後、いざ行動を起こそうとするも、一大学生でしかない私に何ができるのかという壁にぶつかった。答えは出ないまま、東京での物産展のお手伝いや、学習支援ボランティアとして現地を訪れる中で、それまで東北すら訪れたことのなかった自分がいつの間にか「女川」という町を好きになっていることに気がついた。その後、ボランティアコーディネーターの松本真理子さんの勧めもあり、スタディーツアーの企画に取り組み始めた。参加側から企画側となることで気づくことや学ぶことは多く、プログラムを組む中で、被災地としての女川町だけでなく、きれいな海や美味しい食べ物、あたたかい人々のつながりといった魅力あふれる女川を知ってもらいたい、伝えていきたいと考えるようになった。「大学生だからこそできる」情報発信の仕方があるのではないかと、東北とは離れている東京に住んでいるからこそできる支援の方法もあるのではないかと、現在も活動を続けている。

女川町と女川町での活動で得たものは、一歩踏み出さなければ知り合うことのなかった方々との出会いと、その関わりの中で広い視野を持つことの大切さに気づけたことである。当然のことではあるが、自分自身の視点や立ち位置を変えることで見えるものが違ってくる。その中で、自分が正しいと思うことが相手や社会にとって本当に正しいのか問い続ける、そのような姿勢を教えてくれた女川に感謝をし、復興を願い、今後も関わり続けることで自らも成長していけたらと思う。

【巻頭】 学生たちのボランティア活動



Contents

【巻頭】 学生たちのボランティア活動

被災地支援ボランティアで得る生きた学び 法学部法律学科2年 手塚 文裕.....	3
傾聴の大切さに気づかせてくれたボランティア 法学部政治学科2年 佐藤 耕太.....	5
大学生だからこそできるボランティアを探して 法学部法律学科2年 黒川 涼香.....	7
刊行によせて 学生部長 平山 令二.....	12
学生部ボランティア担当委員（法学部教授） 中澤 秀雄.....	13
ボランティアコーディネーター 松本 真理子.....	14

活動編

1. 東北ボランティア	
1. 新入生スタディーツアー.....	16
2. 夏季ボランティア	
(1). 防災学習ツアーバス.....	18
(2). 大学間連携災害ボランティアネットワーク事業 「石巻・女川復興支援インターン」.....	20
3. 春季ボランティア	
(1). 女川スタディーツアー.....	21
(2). 阿部長商店インターン.....	22
(3). 大学間連携災害ボランティアネットワーク事業「女川復興支援インターン」...	24
4. 学生団体の活動.....	25
2. 学内ボランティア	
1. クリーン作戦 春.....	40
2. クリーン作戦 秋.....	41
3. クリーン作戦ミニッツ～昼休み30分間のゴミ拾い活動～.....	42
3. 地域連携	
1. 2014だいすきひの市民フェア.....	43
2. ひらやま減災ウォークラリー～めざせ！ぼうさいリーダー～.....	44
3. 地域での防災講座：大学生と地域で防災力UP「災害図上訓練DIG」.....	46
4. 地域での防災講座：大学生と地域で防災力UP「避難所運営ゲームHUG」.....	47
4. 地域と学生のコーディネート	
1. 地域から（八王子市・日野市・多摩市）.....	48
2. 学生から.....	49

報告編

5. 学内での活動報告	
1. ボランティア活動写真展.....	52
2. 父母懇談会・キャンパスライフ体験会「ボランティア報告」.....	53
6. 学外での活動報告	
1. 中央大学杉並高等学校での報告.....	55
2. 東北学院大学シンポジウムでの報告.....	56
3. 東日本大震災被災地支援大学生ボランティア活動報告パネル展.....	57
4. 国連防災世界会議での報告.....	61

学び編

7. シンポジウム	
1. ボランティアセンター設立1周年記念シンポジウム 「学生だって地域のカ〜災害支援から日常の支え合いへ、 学生ボランティアのカとわがまちの防災力UP〜」.....	64
8. スキルアップ講座	
1. 防災講座「DIG」.....	66
2. 講座「ボランティアマナー講座」.....	67
3. 講演会「災害リーダー育成勉強会〜大川小から学ぶ防災教育〜」.....	68
4. 防災講座「クロスロード」.....	69
5. 講座「傾聴講座」.....	70
6. 講座「団体運営・引き継ぎのためのラーニングセッション」.....	71
7. 講座「災害ボランティア入門」.....	72
8. 講座「震災から学ぶ まちづくり講座」.....	73
9. 講座「傾聴講座」〜震災に遭った人のこころのケア〜.....	74

資料編

9. 表彰状受賞学生	76
10. ボランティアセンター 利用集計	77
11. ボランティアセンターの取組記録	78
12. 協力・連携・助成金	82
13. メディア掲載	
1. 大学関係広報誌.....	85
2. 新聞記事・広報誌等.....	96
3. メディア放送.....	100
14. 作成物掲載	
1. 刊行物.....	101
2. ポスター・チラシ.....	102

刊行によせて



学生部長 平山 令二

2冊目となる中央大学におけるボランティア活動の報告書をお届けいたします。今回は、「ボランティアステーション報告書」となっていますが、今回は「ボランティアセンター報告書」となりました。「ボランティアステーション」が2014年4月から一般的な名称である「ボランティアセンター」に名称変更したためです。

さて、是非とも触れておきたいことがあります。それは、中央大学におけるボランティア活動に大きな刺激を与えていただき、また牽引していただいた黒田裕子さんが昨年9月24日に逝去されたことです。私も中央大学での黒田さんの講演を聞き、瘦身に気魄をみなぎらせたお話に心から感動しました。黒田さんは神戸で看護師をしていたときに、阪神・淡路大震災を体験し、被災者の支援活動に全力を傾注され、それ以来、中越地震など各地の被災者の支援に生涯を捧げてこられました。東日本大震災でも、被災者に寄り添った支援活動を指導し、中央大学のボランティア学生を指導、励まし、またときに叱咤してくださいました。被災者に常に寄り添ってきた黒田さんの行動と言葉は、その警咳に接した学生たちの心に残りつづけるものと信じます。

昨年夏、私もゼミの学生を引率して気仙沼を訪ねました。現地の現状は復興にはほど遠く、土地のかさあげ工事が行われているせいもあり、空き地が目立っています。夜は、被災時の避難所となったホテルの社長のお話を聞かせていただきました。生々しい津波襲来時の模様や、ホテルに避難してきた被災者への迅速な対応の話などが印象的でした。現状については、東京オリンピックの準備により被災地が忘れられるのではないかと、という深い憂慮が表明されました。特に印象づけられたのは次の言葉です。「被災からしばらくして、被災時のことを話す機会があったが、ホテルや自宅が無事だったせいもあり、初めは自分の経験を話すことに意味が見いだせなかった。ところが、訪問者たちの前で語る機会が増えるうちに考えが変わった。すなわち、被災をこの場所の過去の出来事と限定的に考えるのではなく、これから予想される首都直下型地震や南海地震なども含み、被害を少しでも減らすために今語り続ける必要がある」と考え直したそうです。

示唆に富む話です。被災地でボランティアを継続し、あるいは被災者の話を聞くことは、そのまま明日、いや今日あるかもしれない災害の備えとして有効です。被災地のボランティア活動が震災から4年を経ても大切な理由のひとつがここにあります。幸い中央大学では、被災地支援に関心を持ち続ける学生がいて学生団体もあり、被災地からの評価もいただいております。また大学としても継続した支援体制を確認しています。

2015年4月からは、ボランティアコーディネーターが2名体制になり、センターに事務員の配属も決まりました。これまで以上に被災地支援を強化することができますし、さらに大学の近隣地域でのボランティア活動にも一層取り組むことができます。これからも当センターにご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

■平山 令二

(法学部教授 専門分野／ドイツ語・ドイツ文学)

1951年新潟生まれ。東京大学人文科学研究科博士課程（ドイツ文学専攻）中退。山形大学講師などを経て、1984年より中央大学法学部勤務（ドイツ語担当）。専攻はドイツ語・ドイツ文化。現在の研究テーマは、レッシングやゲーテなどの18世紀ドイツ文学・思想。ドイツのユダヤ人文化。ホロコーストからユダヤ人を救った人々も研究している。2013年4月1日より学生部長に就任。



学生部ボランティア担当委員(法学部教授) 中澤 秀雄

中央大学ボランティアステーションが2014年4月に「センター」と改称されたあと初めての事業報告書もまた、豊富な成果・実践・取り組みと学生の成長が収録されたものとなりました。この成果は何よりも、勇敢な学生たちと激務を顧みない職員の奮闘によるもので、心より敬意を表します。全学的には、学長、副学長、社会連携推進会議や学会をはじめ多くの方々からご理解ご支援を頂くことにより、社会福祉セクションを持たない中央大学における新しい取り組みを定着させることができました。また資金面でセンターと学生の活動を支援くださった学会・信行寺・電通育英財団・日本財団学生ボランティアセンター・住友商事の皆様には衷心より御礼申し上げます。いつも学生たちがお世話になっている現場の皆様にもこの機会に深く御礼申し上げます。

東日本大震災から3年以上にわたり活動を継続してきた中大生に対して、東北社会は信頼を寄せてくださっています。被災地支援を継続している4団体のうち「チーム次元」代表だった安原元樹君は社会貢献分野で2013年度日本学生支援機構大賞を授与されました。「はまぎくのつぼみ」は2014年11月に宮古市社会福祉大会で表彰され、佐藤耕太君が社会福祉協議会会長より感謝状を受け取りました。「面瀬学習支援」共同代表である宮崎汐里さんは2013年度学会会長賞をうけました。気仙沼のほとんどの世帯が閲読している『三陸新報』紙上では、6人の学生がボランティア体験手記を連載しました。気仙沼には多くの大学がボランティアを送り込みましたが、このような特別扱いを受けたのは中央大学だけです。

一方では、その気仙沼で中大生を仮設住宅に受け入れ、優しく厳しく指導して下さった黒田裕子さんを失うという、我々にとって比べるもののない悲しい出来事が起きたのも2014年でした。亡くなってから多くのメディアで特集が組まれ、彼女には「仮設住宅の天使」「日本のマザー・テレサ」などの称号が捧げられています。多くの人の心に刻まれる偉大な指導者との縁に恵まれたことに、学生とともに感謝しています。

2015年4月からはボランティアコーディネーター2名体制に移行することが決まっています(2015年度から採択された教育力向上推進事業費による)。さらに各学部教授会にご承認いただければ「運営委員会」の統括のもとに、ようやく中央大学諸規程上に位置づけられ、またPDCAサイクルを備えた安定したボランティアセンターとなりそうです。多摩地域での活動も本格化していきます。東日本大震災から4年。種から芽になり、枝葉を広げてきた中央大学ボランティア文化を支援して下さった全ての皆様に重ねて感謝申し上げますとともに、引き続きのご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

■中澤 秀雄 (法学部教授 専門分野/政治社会学・地域社会学)

東京都出身。1994年東京大学卒。2001年東京大学から博士(社会学)の学位を取得。札幌学院大学社会情報学部講師、千葉大学文学部准教授を経て2009年から現職。日本社会学会、地域社会学会等に所属。主著は新潟県の原因問題を扱った『住民投票運動とローカルレジーム』(ハーベスト社)や廃棄物・原子力・環境文化等のテーマを幅広く扱った『環境の社会学』(共著、有斐閣)など。前者により第5回日本社会学会奨励賞、第32回東京市政調査会藤田賞などを受賞。2012年4月1日より学生部ボランティア担当委員に就任。



ボランティアコーディネーター 松本 真理子

おかげさまで中央大学ボランティアセンターは設立から2年が過ぎ、学生の活動を支えてくださった皆様にご場を借りて御礼申し上げます。

センターの2014年度は、近隣のボランティアセンターと手を携えて東北と多摩をつなぐ小さな一歩を踏み出すことができました。6月、明星大・八王子市・日野市各ボランティアセンターの協力で「災害支援から日常の支え合いへ」をテーマに中大VC1周年記念シンポジウムを開催しました。「東北で学んだ災害の教訓を多摩の防災に生かしたい」と学生たちが発した声に地域が応えてくださり、その後「災害図上訓練」や「避難所運営ゲーム」などの防災訓練が地域を会場にして行われました。机を囲んで学生と地域の方が頭を突き合わせて知恵を絞り合う姿がいたるところで見られ、少しずつ「顔の見える関係」が広がっていきました。11月には日野市平山小学校区で子どもを対象とした「ひらやま減災ウォークラリー」を中央大・明星大・東京薬科大の学生らが中心となり行いました。「学生ががんばっているので私たち大人もがんばらなきゃ」と、地域からの協力者は70人にもなりました。こうした地域を巻き込んだ防災活動は、2015年3月、日野市社会福祉協議会より表彰いただきました。また、東北ではこれまでの縁を大切しながら刻々と変わる地域の状況に合わせ価値ある活動を模索しました。被災企業の視点から震災と復興を学ぶ「復興支援インターン」（主催：復興大学）と「阿部長商店インターン」は、「学生が来て社内が活気づいた」「学生ならではの視点が商品開発の参考になった」という言葉をいただき、復興期における学生の役割を見出すことができました。

学生のできることは限られていますが、地域の温かさや息づかい、営みに触れ、現場から学ぶことを知り、自分のできることは何かと自問するなかで、「地域からいただいたものをいつか還したい」という想いが芽生え、それが学生のボランティア活動を続ける原動力になっています。2011年4月震災で入学式をせず大学に入学した学年は、被災地で人の暮らしをみたことで、「被災地支援学生団体」を結成し、後輩たちに活動を引き継いで2015年3月志を持って社会に羽ばたいていきました。ここまで学生を育ててくださった地域のお一人お一人に心から感謝申し上げます。

さいごに、初期より学生たちを指導してくださった黒田裕子さんが2014年9月24日ご逝去されました。最期の様子を撮影したドキュメンタリー番組でベッドの上の黒田さんは「…がれきの撤去が若者の仕事じゃない。その向こう側に人間がいる…もっとその意味づけを教えたい」と仰っていました。当センターが設立された理由であり、これからも忘れてはならないことが、この黒田さんの言葉だと感じます。黒田さんが遺してくださったもの、卒業生たちが築き上げたもの、地域の皆様からいただいたもの、震災で失われた命が教えてくれたもの、それらを次の世代に引継ぎ学生と共に新しい一年をつくっていきたいと思います。

今後とも皆様のご支援ご指導をいただければ幸いです。何卒よろしくお願い申し上げます。

■松本真理子

(中央大学ボランティアセンター コーディネーター)

千葉県出身。2004年明治大学卒。在学時にキャリア教育のNPO団体立ち上げに参加。コミュニティ紙の記者、地産地消イベントプロデューサーなどを経て、2011年9月より宮城県女川町で子どもたちの放課後の居場所「コラボ・スクール女川向学館」（運営：認定NPO法人カタリバ）にて広報・地域コーディネーターとして従事。2013年4月より現職に就任。

活動編

1. 東北ボランティア

1. 新入生スタディーツアー

- 実施日：5月23日（金）～25日（日）
場所：宮城県牡鹿郡女川町
参加者：29人（新入生22、学生スタッフ5、職員2）
目的：学生が東日本大震災で被災した地域を実際に見ることで現在の被災地の様子を知って貰い、これからボランティア活動を始めるとともに、自分自身に何ができるのかを学び、考える機会とする。
行程：1日目：多摩キャンパス発（車中泊）
2日目：石巻到着（門脇小学校見学）
女川町着＝町立病院見学＝巨大冷蔵冷凍庫マスカ－見学＝復興まちづくり情報交流館＝きぼうのかね商店街＝女川向学館＝「いのちの石碑」見学＝EL FARO宿泊
3日目：蒲鉾本舗高政見学＝女川発＝多摩キャンパス到着・解散
主催：中央大学ボランティアセンター
協力：チーム女川

〈参加者の声〉

- 活動の中で最も心に残っていることは、復興まちづくり情報交流館での阿部真紀子さんのお話です。「茶色い町」や「何も無い」、「私達にとってはまだ3年」といった被災した方だからこそ出る言葉を通して気持ちまでも伝わってきました。津波の映像を見せていただいたり、地震の規模や現在の復興状況をわかりやすく様々な情報と共に教えていただきました。私達に伝えたい言葉は「人ってあったかいなあ」や「まず、見においでよ」と言ったメッセージである、と終始穏やかな雰囲気でお話しされていた阿部さんですが、話の途中で少し思いつめたようになっていたり、私が感想を述べていた時は少し涙ぐんでいたような様子であったのを見て、「新しい女川に向かって活動しているような人でもやはり辛いものは辛いんだ」と感じ、その阿部さんの姿がとても印象に残りました。（経済学部1年）

〈学生スタッフの声〉

- 昨年一期生としてスタディーツアーに参加し、私たちの様な外から訪れた人にも関わらず、女川町の方々にとっても良くしていただいたことが嬉しく、皆さんに恩返しをしたいと思い学生スタッフとして参加しました。ボランティア企画をつくっていくのはとても不安でしたが、学生スタッフのメンバーで協力して実施することができました。1年生には、今回の経験を今後の学習など、次に繋げて欲しいです。（法学部2年）

〈活動風景〉



事前勉強会



事前勉強会



女川町の現在 (2014.5)



マスクにてお話をきく



マスクにて-30℃を体験



情報交流館にて震災時のお話



きぼうのかね商店街にて震災時のお話



きぼうのかね商店街にて震災時のお話



きぼうのかね商店街にて震災時のお話



いのちの石碑の見学とお話を伺う



高政にて震災時のお話



女川向学館にて集合写真

2. 夏季ボランティア

(1). 防災学習ツアーバス

- 実施日：9月2日（火）～4日（木）
場所：宮城県気仙沼市、石巻市、牡鹿郡女川町
参加者：23人（学生20、教職員3）
目的：学生が長期休業期間を利用し、実際に東日本大震災で被災した地域を訪れ、現在の被災地の様子を知り、入門的なボランティア活動をすることで、被災地域のために自分自身に何ができるのかを学び、考える機会とする。
行程：1日目：新宿発、高速バスにて現地へ移動
2日目：午前：気仙沼市魚市場見学、(株)阿部長商店へ訪問
午後：リアス・アーク美術館見学、大谷・野々下海岸で防潮堤見学、志津川自然の家へ移動、学習会を2回実施
3日目：午前：大川小学校見学、女川町立病院高台「いのちの石碑」見学
夜：新宿着
主催：中央大学ボランティアセンター
支援先：宗教法人信行寺「絆基金」

〈参加者の声（事前レポートより抜粋）〉

- ・実際に被災した地域を訪れ、震災後3年が経過した現在の復興の状況を見て、今後の行政のあり方や一個人としての自分の考え方を見つめ直したい。また、将来土木の仕事を希望しているので、今後起こりえる震災に対し、どのような減災・防災が必要であり、住民の方々はどのような取り組みを望んでいるかを考えたい。（理工学部3年）
- ・被災地の現状を自分の目で確かめたい。そして現状を知った上で今後必要とされる支援のあり方を学び、自分に出来ることを積極的にしていきたい。そして自分の町で災害が起きたとき、どのような行動を取ればよいか、学んだ知識を役立てたいと思う。（法学部2年）

〈活動風景〉



気仙沼魚市場見学



市場見学



現地の方からお話を伺う



(株)阿部長商店訪問



大谷・野々下防潮堤見学



志津川にて勉強会



志津川にて勉強会



集合写真

(2). 大学間連携災害ボランティアネットワーク事業 「石巻・女川復興支援インターン」

実施日：9月8日（月）～13日（土）

参加者：8人（学生6、職員2）

概要：被災地外の大学の学生が、被災地企業で「復興支援インターン」として数日間の職業体験を実施。その体験を通じて、被災地及び被災企業の現状、復興の進捗、課題等について学ぶ。体験をもとに、被災地外の大学祭において、模擬店出店により被災地産品を食材とした料理を提供するとともに、パネル展示やインターン報告会の実施等により被災地及び被災企業の現状、復興の進捗、課題等に関する情報を広く発信する。

活動内容：水産加工会社への企業インターン

活動先：(株)高政、(株)岡清

行程：1日目：仙台から現地へ。オリエンテーション後、受け入れ企業と顔合わせ。

2～5日目：終日、職業体験

6日目：現地での活動報告会

主催：復興大学（事務局：復興大学災害ボランティアステーション）

共催：復興庁宮城復興局、各地域の商工会

〈参加者の声（レポートより抜粋）〉

- 私が訪問した企業は、当時被災状況は小さい工場だった。しかし、従業員の方々からお話を聞くと、まだ被災した周辺は住宅も建っておらず、復興に時間が掛かると思った。風評被害は加工産業より、一次産業のみの人たちが言われていると聞き、3年経ってもこの震災は本当に風化させていけないと強く思った。
(経済学部1年)
- 今回の活動をとおして学んだこと、感じたことを学内での報告会で発信したいと思う。そして現地の現状を行ったことのない学生に伝え、まずは知ってもらい、興味を持ってもらいたい。また大学が発行している広報誌へ寄稿し、たくさんの教職員をはじめ大学関係者に知ってもらいたいと思う。
(商学部2年)

〈活動風景〉



高政にて仕事内容の説明を受ける



岡清で従業員の方と一緒に作業



商品の箱詰めなど行う

3. 春季ボランティア

(1). 女川スタディーツアー

- 実施日：2015年2月14日（土）～17日（火）
- 場所：宮城県気仙沼市、石巻市、牡鹿郡女川町
- 参加者：14人（チーム女川7、新規参加学生6、職員1）
- 目的：学生が東日本大震災で被災した地域を実際に見ることで現在の被災地の様子を知らせてもらい、これからボランティア活動を始めるときに、自分自身に何ができるのかを学び、考える機会とする。また、新年度5月に実施予定の「新入生対象・被災地スタディーツアー@宮城県女川町」に向けての学びとチーム作りの機会とする。
- 行程：1日目：夜：新宿発、高速バスにて現地へ移動
2日目：午前：石巻着＝女川町＝地域医療センター＝まちづくり情報交流館
午後：原子力PRセンター＝女川向学館
3日目：午前：(株)高政＝MASKKER＝きぼうのかね商店街＝マルキチ阿部商店
4日目：午前：NPO法人アスヘノキボウ・中村志郎氏によるワークショップ
- 主催：中央大学ボランティアセンター
- 協力：チーム女川
- 支援先：日本財団学生ボランティアセンター

〈参加者の声（レポートより抜粋）〉

- 5月のスタディーツアーを企画にあたり、新入生に対して、実際にまちづくりや復興のために働いている人たちの姿を見たり話を聞いたりして、その人たちの熱意を感じて欲しいと思う。テレビや新聞の特集では載っていないような個人個人の貴重な体験を教えてください。たくさん話を聞いて欲しい。また女川町に行って観光したり、美味しいものを食べたりすることも女川町が復興するための一つの力になるので、スタディーツアーに参加し、現地でしか味わえない貴重な経験をして欲しいと思う。
(法学部2年 新規メンバー)
- 地域医療センターから女川町全体を見ることは、新入生に少しでも女川町の地理を理解してもらうため、津波の被害や脅威を感じてもらうためにも行きたいと思う。また、情報交流館での映像や説明スライドを使用した語り部のお話は、被害状況を理解するためにも行きたいと思った。
(商学部2年 チーム女川)

〈活動風景〉



現地の方からお話を伺う



現地の方からお話を伺う



集合写真

(2). 阿部長商店インターン

実施日：2015年2月16日（月）～21日（土）

参加者：9人（学生6、職員3）

概要：被災企業で、町の復興をけん引する「(株)阿部長商店」にて約1週間の職場体験をし、そこで得たことをもとに後日開催される都内での物産展にてPR活動を行い、東北の力となることを目指す。

活動内容：水産加工会社への企業インターン

活動先：(株)阿部長商店

行程：1日目：朝：仙台駅集合＝お魚いちば＝気仙沼食品へ顔合わせ

2日目：物販・飲食業務（お魚いちば・海の市）

3日目：朝：市場見学＝加工業務に従事（気仙沼食品）＝阿部社長のお話

4日目：生鮮出荷・加工業務（赤岩工場・鮪センター）＝リアス・アーク美術館

5日目：生鮮出荷・加工業務（赤岩工場・鮪センター）＝プレゼンテーション

6日目：気仙沼見学＝尾形亀雄さんのお話＝帰京

〈参加者の声（レポートより抜粋）〉

- ・実際に津波を経験した方のお話を生に聞くことができ、お会いしてコミュニケーションを取った後インターンの活動に入ったため、思い入れが強くなった。（経済学部2年）
- ・「もっときれいだったんだよ」など、気仙沼の方々がぼろりと出した言葉が印象に残った。（文学部3年）
- ・「復興」という言葉を考えなしに用いていたが、その意味は「かつての現状に戻すこと」ではなく、震災を経て「持続可能なまちづくりを目指して柔軟な対応を努めていくこと」という前向きな要素を含んでいるのだと考えるようになった。また、この地域や企業の課題は、人員不足であると実感した。水産業は大変な仕事であり、気仙沼の方々が魚や海と密着した生活を送っていることと、実際に水産業に携わっていることには当然の因果関係が存在するようで、その背後には労働環境や金銭に関係する看過できない問題が潜んでいるのだと感じた。（法学部2年）

〈活動風景〉



マグロの中落ちを取る作業



ワカメの袋詰



集合写真

〈「FOODEX JAPAN 2015」への参加〉

名 称：FOODEX JAPAN 2015（第40回 国際食品・飲料展）

会 期：2015年3月3日（火）～6日（金） 4日間
10：00～17：00（最終日のみ16：30まで）

会 場：幕張メッセ 1～8ホール

活 動 内 容：（株）阿部長商店の新商品の試食の準備、提供、来場者への商品説明、他社ブース
見学

参 加 者：8人（学生5、教職員3）

〈「FOODEX JAPAN 2015」活動風景〉



新商品のPR



新商品のPR

(3). 大学間連携災害ボランティアネットワーク事業 「女川復興支援インターン」

実施日：2015年2月22日（日）～28日（土）

参加者：8人（学生6、職員2）

概要：被災地外の大学の学生が、被災地企業で「復興支援インターン」として数日間の職業体験を実施。その体験を通じて、被災地及び被災企業の現状、復興の進捗、課題等について学ぶ。体験をもとに、被災地外において、模擬店出店やパネル展・報告会の実施等により被災地及び被災企業の現状、復興の進捗、課題等に関する情報を広く発信する。

活動内容：水産加工会社への企業インターン

活動先：(株)岡清、(株)ワイケイ水産、(株)ヤマホンベイフーズ、(株)高政
※本学学生は、高政を除く3社で活動

行程：1日目：東北学院大学にてオリエンテーション

2日目：仙台から現地へ。受け入れ企業と顔合わせ。

3～5日目：終日、職業体験

6日目：現地での活動報告会

主催：復興大学（事務局：復興大学災害ボランティアステーション）

共催：復興庁宮城復興局、各地域の商工会

〈参加者の声（レポートより抜粋）〉

- 被災を受けた企業は、労働力不足が深刻な問題であるという事が改めて分かった。水産加工業はつらいというイメージを持っていたが、各企業、町全体が復興に向けて前向きに取り組んでいることがわかり、大きく考え方が変わった。今後は学内での報告会や大学祭でインターン先の商品を使った「さんまのつみれ汁」の販売、女川町や企業の紹介等を行いたい。

（法学部1年）

〈活動風景〉



イカの袋詰めの様子



さんまの黒酢煮のパック詰め



最終日の報告会



集合写真

4. 学生団体の活動

中央大学「被災地支援学生団体ネットワーク」について

設立趣旨

中央大学学生部では、2011年3月11日に発生した東日本大震災以降、継続的に被災地支援ボランティア活動を行う学生を支援し続けている。2012年4月からは、「被災地支援学生団体ネットワーク」を設立し、特定の狭い場所と継続的に関係を持つ多くの学生団体を支援する体勢へと移行してきた。

ネットワークの活動内容

- 2012年度から、加入団体を対象に活動資金（とくに交通費）を助成する制度を設け、とりわけ休暇期間中の被災地支援活動を中央大学として継続する。制度の詳細は新年度以降、ネットワーク加盟団体とも相談しながら決定する。助成をうけた団体は、その成果を報告する義務がある。
- 助成の決定如何にかかわらず、活動地までの交通や宿泊（ロジ）についての相談を随時受け付け、大学としてバックアップする。
- 活動内容についても学生部ボランティア担当が随時相談に応じ、必要に応じて現地のキーパーソンとの橋渡しを行い、被災地のその時点での実情に応じた活動を、情報や社会関係資本の側面からもバックアップする。
- 「ネットワーク」全体にまたがる活動として、東京でもできる活動（被災地の物品販売や宣伝、写真展など）を積極的におこなう。

《2014年度登録団体》

No	団体名	活動地域	活動内容
1	はまぎくのつぼみ	岩手県宮古市	生活支援、学童クラブ
2	はまらいんや	宮城県気仙沼市面瀬	仮設住宅でのコミュニティ支援
3	面瀬学習支援	宮城県気仙沼市面瀬	面瀬地区の小学生の学習支援
4	チーム次元	宮城県気仙沼市大島	漁業支援等

1. 東北ボランティア

学生部における被災地ボランティア活動に関する補助基準

(趣旨)

第1条 この基準は、学生部委員会が認めた被災地ボランティア活動に必要な費用の一部を補助するための支出に関するものである。

(補助対象)

第2条 補助対象は、その活動計画が学生部委員会で承認されたものとする。

2 補助範囲（※補助する交通費の区間等）については、学生部委員会で決定する。

3 学生部以外からも補助を受けている場合には、その金額に応じて補助範囲を決定する。

(補助基準)

第3条 前条に定める補助費の基準は別表のとおりとする。

(補助の取消)

第4条 計画が中止された場合、または、計画に虚偽があった場合には、補助を取り消すものとする。

(報告書の提出)

第5条 計画実施後は、報告書及び証憑類を学生部長宛に提出するものとする。

(事務所管)

第6条 この基準に関する業務は、学生部事務室学生課が取り扱うものとする。

附 則 (2012年4月17日学生部委員会)

(施行期日)

第7条 この基準は、2012年4月1日より施行する。



仮設住宅で手芸 (はまぎくのつぼみ)



ミーティング (はまらいんや)



海藻を使って紙づくり (面瀬学習支援)



集合写真 (チーム次元)

その他

第9回宮古市社会福祉大会 宮古市社会福祉大会長賞受賞

今年の活動を振り返って：田中知樹（商学部2年 副代表）

今年度は、活動内容の再検討が大きな課題であった。現地には基本的に長期休業中に足を運び、田老地区の実態調査、学童での子供たちとのコミュニケーション、宮古市役所でのヒアリング、荷竹地区仮設住宅での語らいといった活動を行った。昨年卒業した先輩方が築きあげてくださったベースを守りながら、まだあまり東日本大震災の被災地に行ったことのない学生にも広く門戸を開くような活動にしようとした。震災から時間が経過し、特に首都圏の人々との風化が進む中、高頻度ではなくとも活動を継続していくことは極めて重要だと考えている。今年度は第9回宮古市社会福祉大会の社会福祉大会会長賞をいただくこともでき、継続していくことの重要性も強く感じた。今後も、震災のことを忘れないようにするための活動は、首都圏での活動も含めて続けていくつもりだ。

首都圏での活動のメインは中央大学生協での物産展であった。岩手に関心を持ってもらい、間接的な経済支援にもつながることから、昨年に引き続き実施した。このような被災地以外でも出来る活動も、復興支援につながる重要な活動として捉え、今後も定期的に継続していくつもりである。

団体代表を支える立場としては、特に団体運営面でサポートをしてきた。団体所属メンバーのモチベーションを維持し、学生参加者を募っての活動に際してもスムーズな運営が出来るよう努めてきた。現地と直接関わるようなことをあまり多くやってはこなかったが、間接的に復興支援活動の一翼を担えるように考えてきた。

この一年間で学んだ事：吉田沙織（法学部1年）

今年度、はまぎくのつぼみの一員として活動に参加して、たくさんのことを学び、被災地への思いがより強くなったと感じています。

事前に何度か学習会を行ってから夏季休暇中に宮古市を訪問しましたが、実際に現地で活動してみると自分自身の知識の少なさを痛感させられました。また、写真だけでは分からない被害の大きさを知るとともに、震災の脅威を肌で感じる事ができました。被災地に足を運ぶということは、写真を見ることよりも非常に大きな効果があるものだと感じ、これからも継続的に訪問をしたいと強く思いました。

夏の活動では、田老の防潮堤のガイドさん、市役所で復興に携わる中央大学のOBの方、学童保育の方、仮設住宅に住んでいらっしゃる方々からお話を伺う機会が多々ありましたが、一つの視点から考えるのではなく、さまざまな視点から問題について考えていくことが大切だということが分かりました。例えば復興のためのまちづくりについて、住民の皆さんからは不便のない住みやすいまちにしたいという意見や、生活に密着している海のそばに住みたいという意見がありますが、行政としてはこうした意見も踏まえつつ、安全な生活ができるように住民の皆さんのベクトルを同じ向きにしていける必要があります。また、東京オリンピック開催が決定したことが影響し、まちづくりの計画がまとまっても、それを実行する建設会社が決まらないという問題もあります。

来年度以降は、自分自身の成長につながる活動を目指すだけでなく、宮古市の復興をサポートできるような活動を心がけていきたいです。また、テレビや新聞で取り上げることが少なくなってきた被災地の事実を、遠く離れた東京で伝えるということも重要だと考えます。物産展や発表会などで伝えることによって、震災を風化させないということにも力を入れていきたいと思えます。



子どもたちと遊ぶ

団体の紹介：はまらいんや

理念

震災をきっかけにさまざまな日本社会の問題が露呈しました。その問題は医療、福祉、居住環境まで多岐に渡りますが、被災者の方が必要とするものはそれぞれ違います。本当に人間らしく生きるためには何が必要でしょうか。

極寒の雨漏りする家で暮らせますか？

草が生えてくる家で安心して眠れますか？

暮らしは肉体、精神ともに直接大きな影響を与えます。

周囲に話せる相手がいなかったらどうしますか？

重病の時に自分だけだったらどうしますか？

仮設住宅のような外部と孤立しがちな環境ではコミュニティの場が絶たれ、時に孤独死が発生します。コミュニティ作りとその維持が必要とされ、地域的な結びつきは自立の助けとなります。

私たちの活動や一緒に過ごした時間が少しでも住民の方の支えとなり、震災で傷を受けながらも前を向いて生活できるよう、以下を団体理念として掲げています。

その「人」「地域」「暮らし」に焦点を当てた「人間主役のボランティア」であること、そして住民の方の「今日を生ききる力になること」。「人」「地域」「暮らし」上記3点は、本当に人間らしく生きるために必要なことなのです。

活動場所

宮城県気仙沼市面瀬中学校仮設住宅

代表者

手塚文裕（法学部2年）

所属メンバー

宮崎汐里（文学部4年）、喜久里彩芳（法学部4年）、一寸木睦（経済学部4年）、林栞奈（法学部3年）、大和田茉穂（法学部3年）、松澤瞭（法学部2年）、加藤誉士（商学部2年）、志賀未希（文学部1年）、塚田かえで（文学部1年）、佐藤宏樹（法学部1年）

活動先・協力先

日本ホスピス・在宅ケア研究会

特定非営利活動法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク 前理事長 黒田裕子氏

面瀬中学校仮設住宅自治会 尾形修也会長

※2014年度は、電通育英会の助成を受けています。

夏の活動

8月14日～8月20日 6人

8月26日～9月2日 7人

内容：集会所でのお茶会、語らい、住宅訪問、本棚作り

冬の活動

12月13日～12月14日 2人

12月20日 2人

内容：神戸市でのフィールドワーク調査（阪神淡路大震災の教訓を学ぶ）

ヒアリング先：被災地NPO協働センター 村井雅清氏

支援先：宗教法人信行寺「絆基金」の助成



住民の方と将棋で交流

1. 東北ボランティア

12月21日 5人

内容：黒田裕子氏を偲ぶ会への参加（神戸市）
支援先：宗教法人信行寺「絆基金」

12月26日～2015年1月5日 5人

内容：集会所でのお茶会、語らい、住宅訪問、年越しイベントの補助

春の活動

3月7日～3月12日 6人

内容：集会所でのお茶会、語らい、住宅訪問

学習会

前期 ①団体理念の勉強会

回数：20回

内容：先輩方の作った団体理念は初動期の活動に基づいて作られていたため、活動を引き継いだ代にその概念や背景が伝わりきれていなかった。そこで、文献の読み合いを行ったり卒業生から話を聞いたりすることで、今の団体の活動理念が作られた背景を現役のメンバーの間で共有し、自分たちの活動の客観的な意味づけを行った。

②1年生のための勉強会

回数：5回

内容：夏に初めて活動に参加する1年生に向けて、事前学習を行った。第1～4回は気仙沼の文化・産業と震災当時の様子について1年生に自ら調べてきてもらい、発表会を行った。仮設住宅で住民の方々と語らいをするときに、少しでも前提知識があった方が会話しやすいと思い、実施した。第5回は、上級生から1年生に、ボランティア活動を行う上で気を付けてほしいことを伝えた。上から目線にならないように、押しつけのボランティアにならないよう常に相手のニーズを探りながら活動することなどを伝えた。以上の勉強会を行い、夏の活動に備えた。

後期 団体理念の勉強会（1年）

回数：8回

内容：夏の活動を終えた1年生に、自分たちが現地で行ってきた活動の意味づけを行ってもらうために実施した。主に前期に行った理念の勉強会と同じ文献を使用し、団体の理念が生まれた背景を上級生も交えたディスカッションを通して学んでもらった。

今年の活動を振り返って：松澤瞭（法学部2年 副代表）

「抱えていた問題と変化」

私の抱えていた課題は、震災から3年経過したことによって生じた仮設住宅における変化についてどのように対応して活動するべきかというものでした。今年度は夏に2回のみ、かつ、前回から1年空いての参加となってしまいましたが、その分仮設におけるコミュニティの変化を強く感じました。

その変化のうちの1つ目としては、仮設から出られる方が増えている反面、仮設でできたコミュニティが壊れつつあるということが挙げられます。この問題については、我々を指導してくださっている日ホスの方々も前々から懸念していましたが、今年度の活動でその傾向を実感いたしました。原因としては、住宅再建をされて仮設から出られた方の心境として、仮設を訪ねると未だ仮設で暮らしている方々に悪いなという気持ちがあり、それが仮設の方々に出られ

た方々の意思疎通を抑制していることがあります。この傾向を打開する策といたしましては、集会場等における仮設に住んでいる方々と出られた方々を巻き込んだ企画の実施と、我々ボランティアが出られた方々の家に赴き意思疎通を図るといったことが挙げられます。しかしこのまま出られる方の数が増えていくと、企画開催の情報を伝達したり、全ての家に赴いたりすることが困難になってしまうという課題があります。今回の活動では、南部神楽が集会所で行われるということから、その宣伝のために仮設を出られた方々のお宅を訪問することができました。その中には集会所まで足を運んでくださる方々もいらっしゃいましたが、やはり仮設の方々と距離は縮まりにくいようでした。

変化のうちの2つ目としては、仮設の住民の方々の我々に対する接し方の距離が縮まったということです。この変化は、我々と住民の方々の心境が時の経過によって変わってきたということも理由の一つとしてありますが、何より、はまらいんやという団体が活動を継続してきた成果なのではないかと思えます。我々が行う活動は継続が大事と先輩方や日ホスの方々からよく教えていただきましたが、その教えを実体験から学び取ることができて本当に良かったです。

【現地との関わり方と今後の課題】

自分が現地との関わり方で意識したのは、学生であり男である自分ならではのコミュニケーションの取り方でした。実際に、男性の方々と将棋をしたり、ご夫婦の朝のお散歩に同行したり等することで、場合によっては会話による以上の信頼関係の構築ができたように思えます。

最後に我々ははまらいんやが抱えるもっとも大きな課題は、仮設住宅終了後の活動をどのように展開していくかです。これまでは、日ホスの方々の下で活動していましたが、終了後も日ホスについていくのか、それともこれまで学んだことを生かしつつ独立して活動を行っていくかを決断する時が迫っています。

この一年間で学んだ事：志賀未希（文学部1年）

今回初めて活動に参加してみて、私は継続をすることの重要性を肌で感じ、実際に活動することの大切さを学ぶことができた。

初めての活動でとても印象に残っていることは、先輩が住民の方に「おかえり」と声をかけられたことだった。それは何度も繰り返しその方々と接し、良い時間を過ごせたと思われていないとかけられない言葉であり、先輩方の活動が住民の方の中に根付いていると感じる出来事だった。長期的にその方とかかわることによってその方をより理解し、その人に合った支援をすることができる。また活動を継続することは、住民の方に「震災のことを忘れていませんよ」と暗に伝えることにもなる。活動を継続することは住民の方のために大切だと強く感じた。

また最近では東北の様子があまり放映されなくなり、今の東北はどうなっているのか、復興はどうなっているのか、どのような支援が必要とされているのかということは実際に東北へ行き、活動してみないとわからない。直接住民の方のニーズを受け、それに合う支援をしなければならないのだ。そして仮設住宅では、行政との関わりや高齢者と若い世代との関わりなど様々な学びのきっかけがある。自分の興味や学問分野に関係することについて仮設住宅できっかけを拾い、今後の活動や学習に活かすことは実際に活動をしてこそできることだと考える。

自分の中で変化したことについては、常に仮設住宅、東北のことを考えるようになったことがあげられる。それはニュースや新聞を読んでいるときはもちろんのこと、大学の講義を受けているときでも当てはまる。その講義が東北とどのように関連しているのか、また自分の活動にどのように活かせるのかなど考えるようになった。実際に心理学の授業では傾聴やトラウマについての話題があり、活動に活かせるものがあった。今後も私の専門分野である社会情報学とも関連付けて活動をしたいと考えている。



集合写真



ミーティングの様子

団体の紹介：面瀬学習支援

理念

学校とも家庭とも違う子どもたちのための場を開く。

子どもたちにとって私たち大学生は、教師とも家族友達とも違う、気仙沼では普段かかわることのない存在です。そんな私たちの立場を生かし、震災を経験した子どもたちのくつろぎの場、学びの場、成長の場を創ることを目指します。

未来の面瀬・気仙沼の担い手として子どもたちを育む。

私たちが関わる子どもたちは、自分が育った地域を愛し、たとえそこを離れても震災を経験した地域を思って働きかけるような、面瀬・気仙沼の担い手となるような存在です。子どもたちが故郷で震災の悲しみを超えるような楽しい思い出を作り、魅力を知り、考え、思いを持つお手伝いをします。

震災から4年が経ち、東北の状況は変わり、子どもたちの周りの環境や自身の様子も変化し、多様化しています。震災の捉え方も子どもによって変わってきています。それに伴い、私たちがすべきことも変わってゆきます。しかし、震災を経験した地域にとって、子どもたちが希望の存在であることは今までも、そしてこれからも変わりません。私たちは2つの理念をもとに、その時々子どもたちに合わせた活動を考え、行っています。

活動場所

宮城県気仙沼市面瀬地区

代表者

板垣圭（文学部2年）

所属メンバー

市川洋司（文学部4年）、宮崎汐里（文学部4年）、橋本樹（文学部4年）、澤木良将（文学部4年）、豊嶋契（経済学部4年）、高島正暉（総合政策学部3年）、蘆田奈緒（文学部2年）、呉一駿（文学部2年）、大塚麻里（文学部2年）、小林香菜子（文学部2年）、安達麦穂（文学部2年）、田中結衣（文学部1年）、阿久津悠司（文学部1年）、松本紗季（法学部1年）、森美紗子（法学部1年）、齋藤啓市（経済学部1年）

活動先・協力先

気仙沼市面瀬小学校 上沢三区自治会

※住友商事 東日本再生ユースチャレンジ・プログラムの助成を受けています。

夏の活動

8月18日～8月23日 15人

内容：学習指導、「昔の面瀬にタイムスリップ（鯨塚の紙芝居、周辺探検）」、竹を使った水鉄砲づくり、昔豆腐・冷やし中華づくり

冬の活動

12月23日～12月27日 15人

内容：学習指導、はっと汁づくり

春の活動

3月24日～3月27日 14人

内容：学習指導、「面瀬川ピクニックへ行こう！」

事前調査

6月6日～8日 9人

内容：夏季ボランティア活動の事前調査

ヒアリング先：気仙沼市議会議員 今川悟さん

元面瀬小校長 長田勝一さん

藤田正人さん

小野寺憲雄さん

12月5日～7日 8人

内容：冬季ボランティア活動の事前調査

ヒアリング先：面瀬小学校 大森誠志教頭、村上克弥教務主任

気仙沼西高校 小山和美先生（家庭科）

気仙沼高校 佐藤海人さん（高校1年生）

「気仙沼あそびーばーの会」 鈴木美和子氏

支援先：日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）

学習会

前期 回数：2回

内容：夏の活動の材料集め、事前調査に向けた勉強会では、地区の歴史・地理を学んだ。

後期 回数：3回

内容：団体の理念の見直し、学習指導のあり方、事前調査に向けた事前勉強では、ヒアリングする内容のまとめをしたり、ヒアリング先の情報を得たりした。

今年の活動を振り返って：板垣圭（文学部2年 代表）

今年度の活動を振り返るにあたって、ひとつタイトルをつけてまとめていきたい。私の中の今年度の活動は「変化」と題する。団体に参加したのは昨年度の夏。大学学部生1年生の私は、初めての被災地に戸惑いながらも、何とか上級生についていき活動していた。夏・冬・春と活動し今年度を迎え、ここで1つ目の変化が訪れた。「環境の変化」である。団体を作り上げた上級生が4年生となり就活・院試があるため、こちらの活動を中心に置く事ができなくなってしまった。そこで団体の引き継ぎが行われ、私は団体の代表を任されることになった。

私は団体の代表となり、2つ目の変化である「自分の中の変化」が訪れた。まず大きくあるのは責任感を持つようになった事だ。まだまだ至らない点が多いが、自分が率先して動かなければいけないと思えるようになり、学内での活動やシンポジウムなどにも積極的に参加するようになった。またリーダーとして大切な資質である観察力を意識し、現地の子どもたちの様子、復興の様子を考えて見るようになり、以前の自分より話し合いで多くの意見を発言する事もできるようになった。しかし、団体の顔となり責任感が強くなる中、自分の足りない所も見えてくるようになった。それは例えば、団体のマネジメント力や議論のファシリテート力など、自分の勉強不足な部分が多くある。

当時やればやるほど課題が出てきて悩むこともあったが、やっていなければ成長できなかったと今では思う。そして今後も一つ一つクリアにしていき、さらにステップアップしなければならないと考えている。来年度も「変化」のある年にしたい。

この一年間で学んだ事：阿久津悠司（文学部1年）**「東北を身近に感じた1年」**

私がこの1年、東北支援団体に入って一番大きく変化したことは、東北を身近に感じるようになったことです。それまでは東日本大震災の被害の大きさ、それが今なお爪跡を残していることを分かっているにもかかわらず、どこか自分の日常とはかけ離れていることとってしま

1. 東北ボランティア

うところもありました。それは東北を知る情報源が、当時報道で見ていた記憶や、現在時折テレビや新聞で特集される映像や画像・文章によるものであり、当時の記憶は薄れ、文章だけでは想像が働かず、映像・画像があったとしてもそれは東北の姿の一部にしかすぎなかったためだと思われます。しかし学生団体に入り、実際に気仙沼に行き、かさ上げ工事中の街並みや、かつては家々があった地域、巨大で無機質な防潮堤、点在する慰霊碑を見て、震災が奪ったものの大きさ、復興はまだ始まったばかりであることを実感しました。そのとき見た景色は、潮のにおいや風の冷たさと結びついて今でも鮮明に覚えています。また、気仙沼の方々から行政、教育、産業、漁業など様々な分野に関する現状のお話をいただき、過疎や格差、産業衰退の問題は東北の問題だけでなく、国全体の行政のあり方を考える問題なのだと感じました。現地の方々の体験や思いの込められた話は、強く記憶に刻まれ、考えさせられました。

しかし実際に現地と関わり身近に感じたのは問題意識だけではなく、気仙沼の海と山が調和した風土を知り、そこに暮らす方々と交流を持ったことで、気仙沼を好きになり、その地域、そこの方々のために活動したいという思いを持つようになりました。特に面瀬学習支援は小学生を対象にしているので、震災によって様々な状況におかれ、様々な思いを持った子どもたちが、課題を抱えながらも復興に向かっていく町の中でどのように成長していくか、継続して見守っていきたいと思うようになりました。

実際に東北へ行ったことで、身近に問題意識を感じ、漠然とした義務感からではなく自ら東北支援をしたいと思うようになったこと。それが面瀬学習支援に入り、成長したことだと思います。



子どもたちと遊ぶ



水鉄砲づくり



たくさん子どもたちが来てくれます



水鉄砲づくり



宿題のお手伝い



宿題のお手伝い

団体の紹介：チーム次元

理念

「聞く・見る」「考える」「伝える」

私たちの活動は、定期的に現地へ足を運ぶことで、そこからの声を自分たちの耳で聞くことができ、震災当時から今日までの歩みを自分たちの目で追うことができます。

時間の経過につれて、現地のニーズも変化していきますが、その中で私たちができることを「考える」のは想像以上に容易なことではありません。しかし私たちは活動を通して大島の現状に向き合い、常に「考える」ことに努め、人との繋がりを大切にしています。

現地から離れた東京という地で私たちメンバーにできること、それは現地の現状やそこからの声を「伝える」ことであると考えます。震災から4年経った今、日常生活から震災の記憶がだんだんと薄れつつある中で、私たちに与えられた伝える場を活かして、これからも気仙沼を伝えていきたいと思えます。

活動場所

宮城県気仙沼市大島、鹿折唐桑地区

代表者

佐藤公美（経済学部2年）



大学祭でホルモン鍋を販売

所属メンバー

安原元樹（総合政策学部4年）、鈴木貴士（総合政策学部4年）、河西彩（総合政策学部4年）、上城紗葉子（総合政策学部4年）、須藤怜（総合政策学部4年）、角田千紗（法学部3年）中村実央（文学部3年）、梅林彩美（総合政策学部3年）、重里昂江（経済学部2年）、松本萌（総合政策学部2年）

活動先・協力先

漁師 小松俊浩氏、気仙沼復幸マルシェ 塩田賢一氏、
大島公民館長 小野寺樹一郎氏

春の活動

6月13日～6月16日 4人

6月20日～6月23日 9人

内容：復幸マルシェ移転の手伝い（気仙沼市鹿折地区）、漁業支援（大島）

夏の活動

8月15日～8月19日 7人

8月22日～8月26日 5人

8月29日～9月2日 4人

内容：復幸マルシェ移転の手伝い（気仙沼市鹿折地区）、漁業支援（大島）

秋の活動

10月17日～10月20日 4人

内容：漁業支援、仮設住宅訪問

春の活動

2月5日～2月9日 6人

内容：フットボール場設置の手伝い（気仙沼市鹿折唐桑地区）、仮設住宅訪問（大島）

1. 東北ボランティア

都内での活動

11月1、2日 延べ8人
場所：中央大学多摩キャンパス 白門祭
内容：気仙沼ホルモン鍋の販売



漁業支援の様子

学習会

前期 回数：週に1度、毎週木曜日
内容：活動内容（クール設置日程、助成金の使用用途等）に関するミーティング

後期 回数：週に1度、毎週木曜日
内容：活動内容（クール設置日程、助成金の使用用途等）に関するミーティング

今年の活動を振り返って：佐藤公美（経済学部2年 代表）

今年度の始めに代表として就任し活動を行ってきたが、今まで代表の職に就いたこともなく就任直後は何をしたらいいのかわからずとても不安だった。その上、被災直後を知る団体創立時のメンバーが卒業することや、何度も現地経験のあるメンバーが脱退したことで残ったメンバーだけで行えるのかということもこれからの活動が昨年度と同様に行えるのかという点においても不安だった。代表という責任のある職で、何かしなければという思いだけが先走り空回りしてしまっていた部分も多くあり、活動をしたくないと思うこともあった。自分1人で何もかもをしなければいけないという思いが強くなってしまっていたが、創立時のメンバーやボランティアセンターの職員の方々、新規メンバーが私をサポートしてくれたこと、現地の方々が行活動をするたびに温かく迎えてくれたことで今年度は今の私には十分な活動ができたと思う。また今年度から気仙沼大島だけでなく気仙沼市内の鹿折唐桑地区復幸マルシェという新しい作業場所と関わることにもなり、新しいつながりを自分で切り開いていくことで自信にもつながった。

現地での活動の面だけでなく東京にいる間の活動としても、ボランティアセンター主催のイベント等で人前に出て自分たちの活動を紹介することが多く、プレゼンテーション能力も昨年度よりもあがったと思う。書類や、助成金など資金面においても、一般的な大学生が経験しないような事を経験することができ、多方面でスキルアップができていると感じる。これからの大学生活、チーム次元で得た経験を多くのことに活かしていきたい。

この一年間で学んだ事：松本萌（総合政策学部2年）

私が被災地復興支援団体「チーム次元」に入ったのは、2年生の夏ごろでした。1年生のころから参加者として活動をしておりましたが、先輩方の引退を機に同級生のメンバーをサポートしていきたいという思いが強くなり、正式にメンバーとして加わることになりました。

チームに加わってみたことで、参加者とはまったく違う視点で被災地ボランティアの現状を知ることができました。震災直後は大勢の大学生や社会人たちが足を運んだ被災地ですが、今では多くの団体が活動を休止しておりチーム次元でもメンバーが3人しかいないという現実の中で、だんだんと震災が風化していることを実感しました。その一方で復興へ向けて試行錯誤しながら邁進する現地の人たちの姿も目の当たりにしました。

いま、目に見える作業、たとえば瓦礫撤去などいわゆる「被災地支援」は終了し、多くの団体が活動から撤退している状況です。しかし、地面から瓦礫が取り払われ、被災者だった人たちが前に進んでいこうとする今だからこそ被災地に寄り添い、そのお手伝いをしていくことの重要性を感じずにはいられません。

これからの被災地とも心をともし、復興のために何ができるのかを考えるのが私たちの役割であり、それがチーム次元の理念としている「支援が途切れても途切れない人とのつながり」を守っていくことなのかなと感じます。

現在、活動はメンバーの減少とともに大幅に縮小していますが、今後も先輩方から受け継いだこの理念を大切に守っていかうと思いました。

ボランティアセンター学生スタッフ チーム女川

理念

復興の歩みの一歩先を見つめ、女川の人たちの声に寄り添いともに歩む

私たち「チーム女川」が活動をするうえで大切にしていることは、女川町を実際に訪れ、町民の方のお話を伺うということです。現地の方々との対話の中からニーズを見つけ出し、意識することで町民の方々の手助けとなるような活動につなげています。また、私たちの活動は女川の現状や魅力を伝えることを主な目的としています。そのために実際に現地の方々とお話することから町についての理解を深め、より魅力的な女川を発信することにつなげています。

私たちが学んでいること、生活の場を基盤に、個性を活かした活動を行う

女川町での活動だけでなく東京でも活動を行い、女川の魅力を多くの人に発信しています。また、個々のメンバーが興味を持っていることや、大学の授業を通して得たことを活動の中で活かすことを心がけています。女川の方たちと関わる中でメンバーそれぞれの興味・関心・学びの分野の視点から女川町のニーズを踏まえて一人一人が活動の提案をして、団体全員で考えながら活動に取り組んでいます。

活動場所

宮城県牡鹿郡女川町

代表者

黒川涼香（法学部2年）

所属メンバー

稲吉華那（理工学部2年）、矢本貴俊（理工学部4年）、佐藤広基（法学部2年）、久保田亜希（文学部3年）、窪田大悟（法学部2年）、中村亮士（商学部2年）、越智つぐみ（文学部2年）、楠貴裕（法学部1年）

活動先・協力先

女川町のみなさま、女川町観光協会、女川向学館、東北応援団白金支部

春の活動（新入生対象被災地スタディーツアー）

5月23日～5月25日 5人（新入生23名）

活動内容：新入生を対象としたスタディーツアーの実施

春の活動（被災地スタディーツアー）

2015年2月14日～2月17日 7人（公募者6名）

活動内容：学内生を対象としたスタディーツアーの実施、5月実施「新入生対象被災地スタディーツアー」企画に向けてのチーム作り及び現地視察

支 援 先：日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）

都内での活動

7月27日、8月2日、3日 延べ22人

場所：四の橋商店街納涼祭

内容：調理、販売の手伝い

8月17日、23日、24日 延べ18人

場所：麻布十番商店街納涼祭

内容：調理、販売の手伝い



新入生スタディーツアー集合写真

1. 東北ボランティア

10月11日、12日 延べ11人
場所：みなと区民まつり2014
内容：調理、販売の手伝い

11月1日、2日 延べ18人
場所：中央大学多摩キャンパス 白門祭
内容：女川汁（さんまのすり身汁）の販売

事前調査

12月5日～7日 7人
内容：春季ボランティア企画の事前調査、まちカフェでの活動報告
ヒアリング先：阿部喜英氏（有限会社 梅丸新聞店 代表取締役）
島貫洋子氏（きぼうのかね商店街内 婦人服の店ダイシン&かふえさくら店主）
藤中郁生氏（女川桜守りの会）
支援先：日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）

学習会

前期 回数：5回
内容：女川中学校の教諭から、学校防災の重要性について学びました。新しく参加したばかりのメンバーがほとんどであったため、今後の活動に向け知識の不十分さを痛感し、外部の方から被災地の課題を伺う学習会を開きました。

後期 回数：5回
内容：前期の学習会、活動で得た知識を女川で生かすために、傾聴について学ぶ講座をはじめ現地の方との関わりを意識した学習会を行いました。また、復興に関わっている方、大学教授にご協力いただき、防災やまちづくりといったそれぞれの専攻に関係する学習会を開きました。

今年の活動を振り返って：稲吉華那（理工学部2年 副代表）

チーム女川は2013年11月から黒川さんと私の2人で活動を始めました。

女川に向けた支援活動を行いたい思いはあるものの、3年が経とうとしている中、2人で何をすればよいのか、何ができるのか暗中模索の日々でした。

悩んだ末に今の女川を中大生に知ってもらいたいと考え、現地の方から「あの日」のお話を伺う女川町スタディーツアーを企画しました。しかし、他の学生団体のように住民に向けた支援が必要ではないだろうかと悩みはつきませんでした。

悩みながらも3月に引き続き5月の新入生スタディーツアー、夏休みには麻布十番祭り等での女川の物産品販売、11月には白門祭で女川の郷土料理「秋刀魚のつみれ汁」の販売などで、女川の「いま」を発信しました。ツアーの参加者、お祭りのお客さんと交流する中で私たちの活動が3.11、被災地のことを思い出すきっかけとなっていることに気付きました。

女川の方からお話を伺う活動を続けてきた結果、これまで伺ったお話をアーカイブ化し、3.11の体験を多くの人と共有し、次の災害の備えにするという活動を始めました。2014年12月には、これまで女川について関東で情報を発信してきた私たちが、今度は女川で関東での活動について発表する場をいただきました。

また、メンバーが9人まで増え、お互いに学び合いながら活動を続けることができている。副代表として代表とともに明るく積極的に活動できるチームを目指してきました。様々な方との係わり合いのなかで、笑顔で会話することがコミュニケーションで最も大切なことだと学びました。現地の方から「チーム女川はいつも楽しそうに活動しているね」とおっしゃっていたことは私たちの誇りです。

今は昨年感じていた不安はありません。震災から4年が経ち復興が進む中、女川から求められる支援、私たちができる活動の内容は変わっているのだと強く感じています。これからも女川の現状に合った活動方法を現地に通う中で見つけていきたいです。

この一年間で学んだ事：楠貴裕（法学部1年）

私はチーム女川の活動を通して学んだことは人に配慮することの大切さだと思っています。チーム女川では女川町で実際に自分の目で見て、現地の方々からお話を聞くという活動を行っています。お話を聞く際にも失礼がないようにするのはもちろんのこと、思い返すのが辛いであろう被災当時の体験を思い出して話して下さる現地の方々の負担ができるだけ少なくなるように、傾聴講座に参加して相手が話しやすい聞き方のコツなどを学びました。

また、人と接する際にも笑顔で明るく活動を行うことが重要であり礼儀でもあるのですが、私は活動を始めた当初は人と接するのが苦手で初めて会う人とも明るく接することがうまくできていませんでした。お祭りに参加して女川町の商品を販売するお手伝いをする際にも、最初は売り込む声も小さく、明るく活動できているとはいえないものでした。しかし、参加回数を重ねるうちに初対面のお客様と接することにもだんだんと慣れてゆき、先輩たちの活動している様を見て参考にしていくことや女川町の方々との交流を深めていくうちに、少しずつ明るく活動することができるようになりました。

私たちのボランティア活動は多くの人たちに支えられて続けていくことができます。そのことはほかの多くの団体でも一緒だと思います。なのでその人たちに感謝することと同時に嫌な思いにさせないことは、その人たちとつながり続けていくうえで注意していかなければいけないことであり、ボランティア活動を行う上での大前提なのだと実感することができました。



きぼうのかね商店街にて昼食



勉強会の様子



女川まち活にて活動報告



情報交流館にて震災時のお話

2. 学内ボランティア

1. クリーン作戦 春

実施日：6月21日（土）10時～12時
場所：多摩キャンパス周辺
参加者：18人（中大生11、職員4、明星大学生3）
内容：キャンパス周辺のゴミ拾い活動
主催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- 場所によって、捨てられているゴミの種類が違っていた。
- はじめて参加したが、とても楽しかった。また次回も参加したい。
- 地域の役に立てて良かった。継続的に活動することが必要だと思った。
- 清掃をした路を戻ると、ゴミがポイ捨てされていて悲しくなった。ゴミを捨てさせない環境づくりが大切だと思った。

〈活動の様子〉



活動前に自己紹介とルート確認



活動の様子



落ち葉の下にガムの包み紙を発見



集合写真

2. クリーン作戦 秋

実施日：11月22日（土）9時30分～11時30分
 場所：多摩キャンパス周辺
 参加者：27人（中大生16、職員8、明星大学生3）
 内容：キャンパス周辺のゴミ拾い活動
 主催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- ・さほどゴミが落ちていないだろうと思っていたが、いざ活動してみると、空き缶などがゴミ袋いっぱいになり、その様には驚かされました。「自分たちでこんなにキレイに出来た！」という達成感を得られ、嬉しかった。
- ・「ゴミが落ちていない」環境作りをするために私たちができることは何なのかを考えながら、これからもこの活動を続けていきたいと思った。

〈活動の様子〉



草むらの中に大量のゴミが捨てられていました



落ち葉の下にタバコの吸い殻を発見



配水管の中に空き缶を発見



集合写真

3. クリーン作戦ミニッツ ～昼休み30分間のゴミ拾い活動～

「クリーン作戦」に参加した学生から、「もっと定期的にゴミ拾い活動をしたい」という声があがり、今年から昼休みの30分間を活用して、「クリーン作戦ミニッツ」がはじまりました。

中心メンバー：松本修（文学部4年）、清水響（法学部2年）、岩本華奈（文学部2年）

	実施日	参加学生数
第1回	4月15日	4人
第2回	4月23日	3人
第3回	5月7日	3人
第4回	6月4日	4人
第5回	10月20日	5人
第6回	11月10日	2人

〈活動の様子〉



30分間でたくさんゴミが集まりました



ゴミが落ちていないか探しています

3. 地域連携

1. 2014だいききひの市民フェア

- 実 施 日：10月19日（日）10時～15時
 場 所：日野市市民の森ふれあいホール
 参 加 者：延べ21人（前日準備：学生3、職員2 当日：学生14、職員2）
 概 要：日野市内の消費者活動団体、市民活動団体、自治会、交流センター等の紹介、交流イベント等の場
 活 動 内 容：中央大学ボランティアセンターとして参加（ブース出展）
 被災地支援ボランティアのパネル展示と、来場者への展示説明、活動紹介
 運営の手伝い（会場案内、イベント補助等）

〈活動の様子〉



前日準備の様子



来場者へボランティアセンターの紹介



夏のボランティア活動を伝えました



東北ボランティアについて発信しました



日野VC・明星大VCと一緒に集合写真



地域の方と交流しました

2. ひらやま減災ウォークラリー ～めざせ！ぼうさいリーダー～

- 実施日：11月15日（土）9時～15時
場所：日野市立平山小学校
内容：防災や平山の文化・歴史に関するクイズ、防災アトラクションを体験し、シールを集めながらゴールへ向かうウォークラリー。「大学生と地域との協働」で多摩地域の防災・減災について考える内容。
（防災クイズ、文化・歴史クイズ、伝言ゲーム、ジャッキアップ体験、車いす体験、持ち出し品なあに？、水消火器体験、炊き出し、紙食器作り等）
※炊き出しは、平山2丁目自治会の皆さまにご協力いただきました。
- 参加対象者：平山小学校児童、保護者等
人数：約180人（運営側約110人、参加者約70人）
運営：ひらやま減災ウォークラリー実行委員会（中大生・明星大生・東京薬科大生等で構成）
主催：明星大学 減災プロジェクト Fine
共催：中央大学ボランティアセンター、日野市社会福祉協議会
協力：日野市立平山小学校、日野市、日野市基幹型ひらやま児童館、日野警察署、日野消防署、明星大学ボランティアセンター、日野市立平山小学校学校運営協議会
※電通育英会の助成を受けています

〈活動の様子〉



受付



車いす体験



持ち出し品なあに？ゲーム



ウォークラリーに出発！チェックポイントのクイズに挑戦



問題解けたかな～？



クイズに正解し、シールをゲット！



無事にゴール！



水消化器体験



紙食器づくり



地域の方々にご協力いただき炊き出し！



紙食器を使ってアルファ米と豚汁を美味しくいただきました



集合写真

3. 地域での防災講座：大学生と地域で防災力UP 「災害図上訓練DIG (Disaster Imagination Game)」

実施日：8月30日（土）10時～12時
場所：平山季重ふれあい館3階大ホール
参加者：約75人
講師：災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉氏
内容：平山地域の拡大地図を使用し、地域の基本情報、災害想定、公共施設等を書き込みながら、参加者と一緒に町の防災について考える。
主催：中央大学ボランティアセンター
共催：日野市ボランティアセンター、明星大学ボランティアセンター

〈講座の様子〉



地域の方と学生と一緒に考えながら講座を行いました

4. 地域での防災講座：大学生と地域で防災力UP 「避難所運営ゲームHUG (Hinanjyo Unei Game)」

- 実 施 日：11月10日（月）18時～20時30分
場 所：日野市立平山小学校
参 加 者：約65人
講 師：災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉氏
内 容：避難所（学校）を想定した平面図を使い、避難者の情報や避難所で起こりえる状況がかかれたカードを読み上げ、参加者同士で議論をしながら適切にカードを配置していき、運営方法について考える。
主 催：中央大学ボランティアセンター
共 催：日野市ボランティアセンター、明星大学ボランティアセンター

〈講座の様子〉



講師：宮崎賢哉氏



地域の方と学生が一緒に考えながら講座を行いました

4. 地域と学生のコーディネート

ボランティアセンターではコーディネーターが、ボランティアをしたい学生、学生ボランティアを求めている地域の団体などのコーディネートを行っています。特に、地域の情報は、八王子市社会福祉協議会の八王子市ボランティアセンターと日野市社会福祉協議会の日野市ボランティアセンターとの協力を得て行われています。

1. 地域から（八王子市・日野市・多摩市）

ボランティアセンターができたことで、八王子市や日野市から「中央大学の学生の力を貸してほしい！」という声が届くようになりました。相談があったときは、ボランティア掲示板へのチラシの掲示やボランティアをしたい学生が登録しているメーリングリストに情報を流し、呼びかけています。

《2014年度実績》

No	募集内容	月日	募集	応募
1	ひの煉瓦ホール チャリティコンサートボランティア	4月27日	若干名	4人
2	「ひの新選組まつり」当日イベントスタッフ	5月10日～11日	2人	1人
3	みんなの遊・友ランドボランティア	6月8日	若干名	2人
4	日野療護園 花火大会ボランティア	8月7日	若干名	5人
5	南平六丁目田中自治会 炊き出し訓練	9月28日	若干名	1人
6	日野療護園 ふれあい秋まつりボランティア	10月11日	若干名	0人
7	田無特別支援学校 宿泊移動教室引率ボランティア	10月8日～9日	6人	0人
8	日野市 みんなといっしょの運動会 準備、競技補助ボランティア	10月5日	若干名	4人
9	日野市少年学級 運動会ボランティア	10月12日	10人	0人
10	だいすきひの市民活動フェア前日スタッフ	10月18日	若干名	3人
11	だいすきひの市民活動フェア当日スタッフ	10月19日	若干名	13人
12	夢ふうせんバザー前々日ボランティア	10月24日	若干名	2人
13	夢ふうせんバザー当日ボランティア	10月26日	若干名	2人
14	日野市 「第3回イザ！カエルキャラバン！」防災イベント	11月29日	若干名	2人
15	歳末たすけあいバザー	12月7日	若干名	0人
16	少年学級クリスマス会	12月14日	若干名	0人
17	せいせき桜まつり KAOアートボランティア	2015年4月5日	多数	2人
18	デイサービスいずみの森（東豊田）クリスマス演奏ボランティア	12月24、25日	個人or団体	0人
19	多摩市 第6回 ボランティアまつり イベント補助	1月24日	若干名	0人
20	日野市少年学級 工作例会ボランティア	2月8日	10人	0人

2. 学生から

既存の学内サークルからの「地域でボランティアをしたい」という相談があった場合、日野市ボランティアセンターや八王子市ボランティアセンターへ問い合わせし活動先を探します。

また、団体運営に悩んでいるサークルの相談にも応じています。

〈活動風景（日野市 みんなとっしょの運動会より）〉



会場の様子



玉入れ合戦



車椅子補助



集合写真

報告編

5. 学内での活動報告

1. ボランティア活動写真展

実施日：10月21日（火）～28日（火）

22日（水）～24日（金）の昼休みに、夏季ボランティア報告会を同会場で実施。

場所：多摩キャンパス 中央図書館1階

参加団体：被災地支援学生団体、チーム女川、復興大学災害ボランティアステーション主催・復興支援インターン参加者、クリーン作戦

主催：中央大学ボランティアセンター

備考：10月26日（日）ホームカミングデーにて、来場者への説明を実施。来場者数は約100人

〈アンケートより一部抜粋（アンケート回収：54枚）〉

- 人の表情、関わり、動きが分かる写真と丁寧な文章の説明の組み合わせが良かったです。見に来る人の数が大事なのではなく、来た人に意欲や情熱が伝わり、伝染することに意義があると思うので、たとえ大規模でなくても続けてください。（教員）
- 写真が多く雰囲気、臨場感が良く伝わってきました。地域の方の立場に立った活動を通して全国に関心を持てる人たちがいることを伝えていってください。それが被災者の方々の活力になると思います。頑張ってください。（職員）
- 根気よく取り組まれますように期待しています。ご苦勞を次への糧にしてください。（卒業生）
- 伝えたいという思いが詰まった写真がたくさんあり、どの地域がどんな様子か少しでも知ることができて良かったです。継続して活動していることが大切だということを知ることができたので、感謝しています。（文学部・4年）

〈写真展・報告会の様子〉



チーム女川



はまらいんや



面瀬学習支援



チーム次元



復興支援インターン



はまぎくのつぼみ

2. 父母懇談会・キャンパスライフ体験会 「ボランティア報告」

- 実施日：11月8日（土）11時～12時、13時30分～14時30分
 場所：多摩キャンパス 1406会議室
 テーマ：「被災地ボランティアとわたし」
 内容：ターン1：どんな活動内容か（パワーポイントを使用しての報告）
 ターン2：なぜボランティアを始めようと思ったのか
 ターン3：実際に活動を続ける中で何を得ていると思うか
 登壇者：コーディネーター：松本真理子
 報告学生：午前：志賀未希（はまらいんや・文学部1年）
 田中結衣（面瀬学習支援・文学部1年）
 松本萌（チーム次元・総合政策学部2年）
 久保田亜希（チーム女川・文学部3年）
 午後：吉田沙織（はまぎくのつぼみ・法学部1年）
 手塚文裕（はまらいんや・法学部2年）
 松本紗季（面瀬学習支援・法学部1年）
 佐藤公美（チーム次元・経済学部2年）
 楠貴裕（チーム女川・法学部1年）

来場者：延べ約25人

〈アンケートより一部抜粋〉

- ・今まで学生団体がどのような活動をしているのか、詳しく知る機会があまりなかったので、とてもよかった。特に、同じ学生として、何を感じて何を得ているのか、どのような思いで活動をしているのかということが興味深かった。活動を行う中で、将来へとつなげる学生が多いことに改めて気づきました。（中大生）
- ・学生生活は自由な時間が多いと思いますが、そこをボランティアにあて、社会貢献を目指す志について敬意を表します。授業を聞く態度やこの勉強は何に役立てていくのか等を考える様になったという話を頼もしく感じました。今後、社会に出たときに実践力、現場力として大きな力になると思います。（保護者）
- ・学生のうちに色々な経験をされていて偉いと思います。学生さんたちの志しが凄いです。皆さん実際に足を運び活動していて、素晴らしいと感激いたしました。（保護者）
- ・中央大学に限らず、「大学生が学習支援を被災地で行っている」ということは、新聞やTVで見聞きしていましたが、冊子で生の声を読んで、学生が街づくりについての勉強や全戸訪問して生の声をきく、などの社会人ではなかなかできない貴重な役割を担っているのだということがわかりました。（保護者）

5. 学内での活動報告

〈報告の様子〉



チーム次元・松本萌



はまらいんや・志賀未希



面瀬学習支援・田中結衣



チーム女川・久保田亜希



はまらいんや・手塚文裕



面瀬学習支援・松本紗季



チーム次元・佐藤公美



チーム女川・楠貴裕



はまぎくのつぼみ・吉田沙織

6. 学外での活動報告

1. 中央大学杉並高等学校での報告

実施日：2015年2月14日（土）12時～13時

場所：中央大学杉並高等学校 コンピュータ教室

報告者：「はまらいんや」手塚文裕（法学部2年）、加藤誉士（商学部2年）
「チーム次元」佐藤公美（経済学部2年）、重里昂江（経済学部2年）

参加生徒：37人（3年生25、2年生12）

内容：2015年3月12日～14日に陸前高田市、気仙沼市大島でボランティア活動を行う高校生有志を対象に、大学生から現地の様子や初めてボランティアを行う際の注意点などをレクチャーした。

〈報告の風景〉



報告の様子（手塚さん）



報告の様子（加藤さん）



報告の様子（佐藤さん）



質問に応答（重里さん）



会場の様子



熱心に話を聞く高校生

2. 東北学院大学シンポジウムでの報告

名 称：大学間連携災害ボランティアシンポジウム
「復興状況の変化と学生ボランティアの役割」
実 施 日：2014年12月12日（金）、13日（土）※学生の報告は13日（土）9時30分～11時40分
会 場：東北学院大学土樋キャンパス 8号館5階押川記念ホール
主 催：東北学院大学
共 催：復興大学災害ボランティアステーション
大学間連携災害ボランティアネットワーク
復興庁宮城復興局
東北学院大学災害ボランティアステーション
後 援：防災からまちづくりを考える実行委員会
テ ー マ：「全国の大学生の取り組み」
報 告 学 生：2014年夏季・大学間連携災害ボランティアネットワーク主催企画「石巻・女川復興支援インターン活動」参加学生
田村恒介（経済学部3年）、黒川涼香（法学部2年）
学生交通費支援先：中央大学学生会



報告の様子（黒川さん）



報告の様子（田村さん）



パネルディスカッションの様子



会場の様子

3. 東日本大震災被災地支援大学生ボランティア活動報告パネル展

- 実施日：2015年3月5日（木）～11日（水）
 ※3月8日（日）13:30～15:30 イオンホールにて、大学生活動報告会、地域防災力UPイベント「HUG」を実施
- 場所：イオンモール多摩平の森 3階エスカレーター脇
 （日野市多摩平 JR豊田駅北口より徒歩3分）
- 参加団体：明星大学減災プロジェクトFine、虹色の薔薇の会、明星大学ボランティアセンター学生有志、中央大学ボランティアセンター、中央大学ボランティアセンター「チーム女川」、中央大学被災地支援学生団体、復興支援インターンプロジェクト、実践女子大学東日本大震災岩手県宮古市支援プロジェクト、東京薬科大学ボランティア団体I VOL E A、日野市ボランティア・センター
 計1,512人（3/5・182人、3/6・175人、3/7・373人、3/8・278人、3/9・130人、3/10・177人、3/11・197人）
 ※3/8（日）防災イベント…約20人、
 3/11（水）チャリティーコンサート…約300人

〈パネル展来場者の声（一部抜粋）〉

- 感激しました。来て良かった。若い人が頑張っているなんて知らなかった、ありがとう。
 （70代女性）
- 3月8日の報告会に行くよ、頑張ってる。（OB）
- 応援しています。地域としても大学生の活動は心強いので、これからも頑張ってください。
 （平山減災ウォークラリーに参加した保護者）
- 勉強も忙しいのに頑張っている。実際に生で見ようとするのは偉いね。（60代男性）

〈特記事項〉

- 被災地支援活動を実際に行っている方、実際に現地に行き活動をしたことがある方に多くお越しいただき、学生と長時間話したり、握手を交わす様子が見られた。
- 募金箱は置かないのか、大学生を支援するにはどうしたら良いか、という声があった。
- OB、OGの方から声を掛けていただく事が多かった。
- 東北に住んでいた方、実際に被災に遭われた方からお話を頂けた。
- 地域防災に関心の高い自治会の方、高校教員、大学教職員の方に多くお越しいただいた。

6. 学外での活動報告

〈アンケート集計結果（3/8イベントの際に実施）〉

- 東日本大震災被災地支援大学生ボランティア活動報告パネル展
日程：2015年3月5日（木）～3月11日（水）
- 大学生活動報告会／地域防災力UPイベント／五小避難所運営マニュアル発表
日程：2015年3月8日（日）13:30～15:30

場所：イオン多摩平の森店

〈所属〉

項目		回答数
一般	日野市	8
	日野市外	0
大学生		1
大学関係者		1

〈イベントを知ったきっかけ〉

項目	回答数
新聞	1
テレビ	—
チラシ	3
ホームページ	—
ポスター	1
口コミ	4
その他	2
未記入	1

館内アナウンス／家族

【1】本日の感想をお願いします。

- とても良かった。あとイベントとして、産地の物産とか募金があれば良かった。
- 日野市のいろんな地区で行うという希望が見えて来て、社協から各自治体に呼び掛けをしてほしいと思いました。
- 大学生が継続した支援をされているのに感心しました。違う大学と一緒に発表の場をもつのもいいですね。
- 震災から4年が経ち、風化を強く感じます。このような機会がこの時期にあるのはとても大切だと感じました。活動の報告、とても心に残りました。HUGは、人とコミュニケーションをするにも、運営を考える上でも、とても良いゲームだと思いました。
- 興味深く見せていただきました。
- 大変よかった。
- 避難所の配置の良さが良くわかり、今後、勉強しようと思いました。
- 今まで講師の話を聞くのがほとんどだったが、今回は防災ゲーム「避難所運営ゲーム」体験に参加したのは意義があった。
- カードゲームにびっくり。こんな学びがあったのを初めて知った。小中学校でもやってみたら良いと思った。五小の話も聞けて良かった。

【2】3階エスカレーター脇のパネル展示の評価をお願いします。(10段階中)

評価	回答数	理由
1	0	—
2	0	—
3	0	—
4	0	—
5	0	—
6	1	小さくて老眼には少し見にくく、会場ももっと広い方が良い。作品には感動した
7	2	PRしてほしい／場所的に落ち着かない。写真、文字とももう少し大きくしたい
8	2	よく見ていないので、帰りに再度見ます
9	0	—
10	0	—
未	5	活動してるんだなあ実感しました／帰りに見て帰ります／まだ観ていません／帰りがけに見ていきます

評価平均：7.2/10

【3】大学生への応援メッセージをお願いします！

- とにかく頑張ってください！
- 自由にがんばれるのは今のうちです。学生のうちにがんばってください。
- 被災された方が大学生になり、他の地域からの方と一緒に支援をされているんですね。そういう現実があることを知り、とても頼もしく思いました。学生であることを生かしてできること、学生にしかできないことをぜひがんばってください！本日はありがとうございました。
- 本日の活動報告会は、同じ大学生として影響を受けたし、ボランティア、被災地支援について考えさせられた貴重な時間でした。貴重なお話をありがとうございました。頑張ってください！
- 頑張りに感謝！
- 女川町の事例のように、若い人の意見を中心に実施していくことが重要。60才以上は意見がなく、調整役になっており復興が早い。
- ボランティア活動は大変だと思いますが、がんばって下さい。
- 今住んでいる所の自治会は高齢者が多く、若い人が少ない。大学生が市が主催するいろんな場で活動し、ボランティアに力を入れているので有りがたい。災害時活躍してもらおうと思う。
- 大変な中に行動をされて立派だと思う。私なんて泣くだけ。
- 年度によって学生さんは代わると思いますが、細く長く続けられる様地元民は願っていると思います。授業では得られない経験をいっぱいして下さい。勉強もがんばってね。

6. 学外での活動報告

〈活動風景〉



展示物



来場者の方へ活動の紹介



写真の説明

〈3/8イベントの様子〉 報告者：チーム女川 黒川涼香（法・2）窪田大悟（法・2）



窪田大悟さん（左）黒川涼香さん（右）



地域の方々と大学生でHUGを実施



集合写真

4. 国連防災世界会議での報告

名 称：第3回国連防災世界会議

開 催 期 間：2015年3月14日（土）～18日（水）※学生の報告は18日（水）

開 催 場 所：仙台市

参加フォーラム：「復興支援インターン」に関するシンポジウム
～東日本大震災からの復興に向けた学生・地域・行政の協働について～

：3月18日（水）TKPガーデンシティ仙台 ホールB

：主催 復興大学災害ボランティアステーション

報 告 学 生：2014年度夏季、春季「女川復興支援インターン活動」参加学生

黒川涼香（法学部2年）

備 考：FLP崎坂香屋子ゼミにて学生団体「チーム次元」が展示企画に参加

〈シンポジウムでの報告〉



報告学生 黒川涼香さん



報告の様子

〈展示企画：チーム次元〉



展示の前で来場者の方と撮影



パネル展示の説明

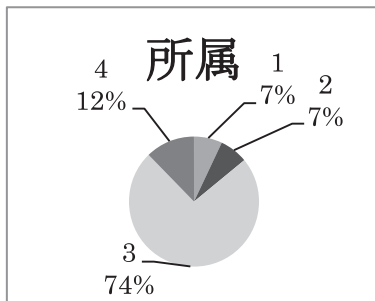
学 び 編

7. シンポジウム

1. ボランティアセンター設立1周年記念シンポジウム 「学生だって地域のカ～災害支援から日常の支え合いへ、 学生ボランティアの力とわがまちの防災力UP～」

- 実施日：6月14日（土）13時～16時30分
会場：多摩キャンパス 9号館クレセントホール
参加者：約100人
内容：第一部 基調講演 13:10～14:50
テーマ：「これまでの災害から考える、事前復興という街づくり」
講師：山中茂樹氏（関西学院大学 災害復興制度研究所）
第二部 パネルディスカッション 15:00～16:20
テーマ：「災害支援から日常の支え合いへ、学生ボランティアの力とわがまちの防災力UP」
コーディネーター：中澤秀雄氏（法学部教授・学生部ボランティア担当委員）
パネリスト：渡戸一郎氏（明星大学人文学部教授・前ボランティアセンター長）
八王子市社会福祉協議会 西田佳子氏
日野市社会福祉協議会 宮崎雅也氏
中央大学法学部法律学科2年 手塚文裕さん
（被災地支援学生団体「はまらいんや」代表）
明星大学教育学部教育学科3年 齋藤元気さん
（ボランティア団体「明星大学 減災プロジェクト Fine」代表）
特別映像出演：日野市立平山小学校 五十嵐俊子校長
- 主催：中央大学ボランティアセンター
共催：明星大学ボランティアセンター
協力：八王子市社会福祉協議会、日野市社会福祉協議会

〈アンケート結果（一部抜粋）〉



1. 学生（回収：2）
2. 教職員（4）
3. 一般（42）
4. その他（7）

〈第一部 基調講演の感想〉

- ・教授が強調しておられた市民の力について、個々の事例を検討していく上で、被災地の人々が望む真の復興にはそれが重要な意義を持っているということに気付くことができました。自分の「復興」という言葉のとらえ方が広がりました。
- ・「事前復興」という考え方を初めて教わりました。自分の中で曖昧だったものが、一つの体

系化を示されて、すっきりしました。また最後の方で、「事前復興の役割」として具体的なプロセスも示していただき、助かりました。自分の地域を守っていくために、合意を形成していく一歩を踏み出せばいいと思います。

〈第二部 パネルディスカッションの感想〉

- 私と同じ年代の方々がどういった活動をどのような経緯で行っているかを知ることができ、勉強になりました。震災の被害を風化させないためにも、継続した交流、震災から学んだ教訓をいかし、防災への意識を高めることが大切だと思いました。
- 若い人たちが積極的に学生ボランティアとして活動していること、心強く思いました。頼りにしています。若い力は地域にとってとても貴重です。

〈シンポジウムの様子〉



明星大・中大の学生スタッフの皆さん



会場のパネル展示



福原学長の挨拶



第一部 山中先生によるご講演



会場の様子



第二部 コーディネーター中澤教授



本学法学部2年手塚さん



明星大教育学部3年齋藤さん



日野市社会福祉協議会 宮崎氏



八王子市社会福祉協議会 西田氏



明星大学 渡戸教授



平山学生部長

8. スキルアップ講座

1. 防災講座「DIG」

実施日：6月19日（木）
会場：多摩キャンパス 5教室
参加者：19人（学生13、教員1、職員2、社協3）
講師：災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉氏
主催：中央大学ボランティアセンター
協力：学生団体「はまぎくのつぼみ」

〈企画学生の声 「はまぎくのつぼみ」佐藤耕太（法学部2年）〉

たまたまテレビのある番組でDIGが行われているのを見て、私はふとDIGをやってみたくと思った。DIGとはDisaster（災害）Imagination（想像）Game（ゲーム）の頭文字をとった、二次災害を想像する能力を高めるための災害図上訓練である。ボランティア活動をしている学生たちはみんな、対象者のことを第一に考えて日々励んでいると思う。でも自分の身や自分の周りにいる人たちの身を守ることをつい忘れてしまっているのではないか。そこで自分自身の防災意識を高める機会として、DIG講習会は最適であると感じた。

講習会を終えて思うことは、やはりDIGをやってみてよかったということである。参加者全員が、災害発生後起こり得る二次災害や避難場所として使える施設などについて、頭を抱えながらも必死に考えていた。DIGは簡単ではないが、こうやって培った二次災害を想像する能力が、将来自分や自分の仲間を助けると思う。講習中は参加者に笑顔が見られる場面もあった。今回は限られた短い時間の中での講習会だったが、その中でお互いに協力し合うことができた。震災時も初対面の人同士が、限られた時間の中でどれだけお互いに協力することができるかが、ものをいうのではないか。私の個人的な感想としては、近隣地域の社会福祉協議会の方々と交流させていただいたことも有意義であった。講習中には、学生では思いつかないような意見を拝聴することができ、とても新鮮だった。今後も定期的にDIGを開催して、もっと多くの方々に参加していただきたいと考えている。そして地域全体の防災意識を高めていきたい。最後に、今回講師を務めてくださった防災専門家の宮崎賢哉さんに御礼申し上げたい。

〈講座の様子〉



二次災害が起こり得る場所を書き込んでいます



意見を出し合い、協力しながら避難ルートを考えます

2. 講座「ボランティアマナー講座」

実施日：6月20日（金）16時40分～18時10分

会場：多摩キャンパス 6501教室

参加者：学生7人

内容：受講者がマナーは「相手への思い遣り」であることを理解し、大学生らしいマナーを考える契機とする内容。

1. マナーについて「相手への思い遣り」

2. 大学生らしいマナーとは

3. マナーの基本「笑顔、姿勢、清潔」

4. 言葉遣い

5. 文書「電話、メール、FAX」

主催：中央大学ボランティアセンター

〈講座の様子〉



講座の様子



講座の様子



いい笑顔といい姿勢を練習



対応に悩んだエピソードを共有

3. 講演会「災害リーダー育成勉強会～大川小から学ぶ防災教育～」

- 実施日：6月30日（月）
会場：多摩キャンパス 3252教室
参加者：21人（学生15、教職員等6）
内容：大川小学校での震災後から今日までの話、前任校の女川中学校での俳句づくりを通じて気づいた生徒たちの心の変化、女川町での、1000年後の命を守るための「命の石碑」の話、学校での防災訓練についての取り組みなどから、防災教育に視点を当てて講演いただき、学生たちが多摩地域での防災学習に生かすことを目的とする内容。
講師：東松島市立矢本第二中学校防災担当主幹教諭 佐藤敏郎氏
主催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- 大川小学校の震災当時の状況を聞き、意志決定の遅れ、意思統一がされなかったなど、様々な要因が重なって起きてしまったことだと改めて分かりました。大川小学校のことは、より多くの人に事実を知って貰い、深く考えて欲しいと思います。
- 初めて震災当時のお話を聞き、とても心に刺さるものがありました。自分の日頃の防災に対する意識が甘いことも改めて感じました。8月に宮城県にボランティア活動に訪れるので、学びの多い活動にしたいです。

〈講演会の様子〉



講師：佐藤敏郎氏



熱心に学ぶ学生たち

4. 防災講座「クロスロード」

- 実施日：8月8日（金）10時～12時
 会場：多摩キャンパス 6408教室
 参加者：12人（学生10、職員2）
 内容：学生が平時から防災について積極的に考え、取り組むヒントとなるような、実技体験、ゲーム、演習等による講座を行うことにより、広く学生の防災意識の普及啓発と、災害時の安全確保に寄与することを目的とする内容。
 講師：災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉氏
 主催：中央大学ボランティアセンター
 協力：被災地支援学生団体
 ※電通育英会より一部助成をいただいております

〈参加者の声〉

- ・現実の、今の自分とは違う立場を想像し、判断することの難しさ、ジレンマを感じた。また、同じ問題に対して市民側、行政側それぞれの立場に立って議論をしてみたいとも思った。
 （文学部1年）
- ・お互いの意見をしっかりと話し合えることは、防災に限らずコミュニケーション能力の向上にも有意義だと思った。
 （法学部2年）

〈講演会の様子〉



講師：宮崎賢哉氏



カードを使って意見を出し合います



参加者同士で意見の共有、検討を行います

5. 講座「傾聴講座」

実施日：11月22日（土）13時～16時

会場：多摩キャンパス 学生部委員会室

参加者：8人（学生5、職員3）

内容：学生が、今後のボランティア活動における高齢者施設や仮設住宅等での傾聴ボランティアや、幅広い年代の方々とコミュニケーションを円滑にする際などに生かすことを目的とする内容。

講師：NPO法人パートナーシップアンドリスニングアソシエーション代表
後庵正治氏

主催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- ロールプレイの中で、私自身が聞き手のときに「ペンを触って焦っているのがうかがえる」「表情やリアクションが少ない」という指摘を受けた。以前にも言われたことがあることだったので、多かれ少なかれ意識はしているつもりであったが、改めて気づくことができ良かった。これからも練習を重ねていきたいと思う。（商学部2年）
- 「相手（話し手）が主役であるということは、決断や選択をすることも、悩みや不安から立ち上がるのも相手次第だ」という事が、講義の中で特に心に残っている。改めて文字にしてみると当たり前のことのように思えるが、どこかで「私があの時、相手に対してああできなかったせいだ」と思いがちであったことを振り返ると「誠実さを持って相手と接することしか自分にはできない、後の事は相手自身が決めることだ」という先生の言葉はとても印象に残り、それと理解した上で“傾聴”に取り組みたいと感じた。気仙沼では傾聴モードになって、違うパーソナリティーの人を受け入れられても、日常生活ではどんな小さな違いでも受け入れることを拒む癖があるので、「パーソナリティーの人をどれだけ受け入れられるかで、傾聴の違いが分かる」という先生の言葉を受け、多くのことを自分のものにできる様にトレーニングしたい。（文学部4年）

〈講座の様子〉



講師：後庵正治氏



ロールプレイの様子



集合写真

6. 講座「団体運営・引き継ぎのためのラーニングセッション」

- 実施日：12月4日（木）18:15～19:45
 9日（火）16:40～18:10、18:15～19:45
 11日（木）18:15～19:45
- 会場：多摩キャンパス 7402教室
- 参加者：被災地支援学生団体所属学生 延べ約23人
- 内容：被災地支援学生団体で活動している学生が、現地での活動におけるマナーや活動内容の振り返り、学生自身やチームとしての弱みや強みの認識、問題意識の再確認を行うことで、今後、学生団体が次の世代へうまく引き継ぐことを目的とした内容。
- シチュエーション・ラーニング（インタビューに基づき、実際に起きた課題の状況を把握し、個人をモデルし、他者の体験を追体験すること）を教材として使用して実施。
1. 被災地ボランティアその価値
 2. 次世代への継承
 3. 乱さない配慮
 4. まとめ
- 講師：株式会社ラーニングイニシアティブ 浅野高光氏
 主催：中央大学ボランティアセンター

〈参加者の声〉

- 次の世代に引き継ぐ事の必要性や何を念頭に置き、引き継ぐべきかを理解した。
- 活動の目的を明確化する必要があると感じた。
- 活動を理論的に理由付けしなくても、もっと単純に考えて行動することで価値が生まれてくることを学んだ。
- 今まで活動について考えるとき、現地の人言葉を手がかりとしていたが、「なぜ」を現地の状況から追いかけていくことも大切なのだと改めて気がついた。今後、代替わりをするにあたって、活動について話し合い、今までの想いを後輩にきちんと伝えられるよう、講座で学んだ事を活用していきたい。

〈講座の様子〉



講師：浅野高光氏



講座の様子



講座の様子

7. 講座「災害ボランティア入門」

- 実施日：12月18日（木）18時～21時10分
会場：後楽園キャンパス 6409教室
参加者：7人（学生5、職員2）
内容：1. 東日本大震災とボランティア
災害の種類と防災、減災の基本知識
自分が被災したときのために
2. 災害ボランティアの役割と種類
ボランティアに参加するときの心構え
被災地で注意すべきケガや病気
3. 活動中のトラブルを想像するワークショップ
個人でできる将来の災害への備え
- 講師：一般社団法人ピースポート災害ボランティアセンター
合田茂広氏、辛嶋友香里氏
主催：中央大学ボランティアセンター
協力：日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）

〈参加者の声〉

- 個人でできる災害への日頃の備えや、災害支援ボランティアを行う際に、現地で注意すべき事（ケガや病気になった際の対処法や、参加者としての心構えなど）について、改めて学ぶことができた。

〈講座の様子〉



講師：ピースポート 合田茂広氏



講師：ピースポート 辛嶋友香里氏



熱心に受講する学生たち



Gakuvo・瀧道子氏による団体の紹介

8. 講座「震災から学ぶ まちづくり講座」

- 実施日：12月19日（金）18時～19時30分
会場：後樂園キャンパス 6413教室
参加者：8人（学生6、職員2）
内容：学生が被災地でのボランティア活動やスタディーツアーを通して実際に見た現地の復興・復旧への取り組みを改めて深く学ぶ機会として、宮城県女川町を事例とした内容。
1. 都市計画は必要か
 2. 都市計画で何ができるか
 3. 都市計画事業のプロセス
 4. 住民参加のプロセス
- 講師：ランドブレイン株式会社 石村壽浩氏
主催：中央大学ボランティアセンター

〈講座の様子〉



講師：石村壽浩氏



熱心に話を聞く学生たち

9. 講座「傾聴講座」 ～震災に遭った人のこころのケア～

実施日：2015年2月10日（火）13時20分～15時
会場：多摩キャンパス 学生部委員会室
参加者：11人（学生8、職員2、一般1）
講師：山科満文学部教授
内容：3月11日が近づく中、現地でのボランティア活動にあたり、震災のころを思い出す住民の方と話をする上で気をつけるべき傾聴の仕方や着目すべき相手の仕草について。
協力：学生団体「はまらいんや」

〈参加者の声〉

- 怒りの矛先を向けられるというのは、怒りの吐け口として必要な役割であること、地域の人の前では話せない事も外から来る人には話すことができるケースがあるということがわかった。（文学部1年）
- 震災で傷ついた方のお話を聞くと、励まさず相づちを打つことが大切ということ、また、人の話を聞き、相手にしっかり聞いている、聞いた事を次に会ったときに「覚えているよ」と伝えることも大切だと良く分かりました。（法学部3年）

〈講座の様子〉



講座の様子



発案者：「はまらいんや」所属 志賀さんからの感想

資料編

9. 表彰状受賞学生

(1) 中央大学学生奨励賞

2013年度 中央大学学員会会長賞 社会等の分野 個人受賞 文学部・宮崎汐里
2014年度 中央大学学員会会長賞 社会等の分野 個人受賞 経済学部・重里昂江
2014年度 中央大学学員会会長賞 社会等の分野 団体受賞 被災地支援学生団体ネットワーク「はまぎくのつぼみ」

(2) 第9回宮古市社会福祉大会

社会福祉大会長賞 被災地支援学生団体ネットワーク「はまぎくのつぼみ」

(3) 社会福祉法人日野市社会福祉協議会「第30回福祉のつどい」

表彰状受賞 法学部・森山智洋、法学部・手塚文裕（減災ウォークラリー実行委員会）



2014年度中央大学学生奨励賞
(左から)「はまぎくのつぼみ」田中知樹さん、佐藤耕太さん、「チーム次元」重里昂江さん



第30回福祉のつどい
(左から) 森山さん、齋藤元気さん（明星大学）、手塚さん、小林玄武さん（明星大学）

10. ボランティアセンター 利用集計

ボランティアセンター相談者統計（人）

月	相談者	男	女	法	経	商	文	総	理	不	1	2	3	4	他	震災	教育	福祉	国際	構内	他
4月	73	23	50	24	11	8	17	1	1	12	52	6	9	2	4	35	10	7	2	3	15
5月	48	26	22	24	5	7	2	2	0	1	23	5	11	2	0	19	18	11	18	9	15
6月	69	32	37	27	7	4	7	3	0	8	15	22	8	1	4	22	7	2	5	0	20
7月	53	34	19	19	9	9	10	0	0	1	20	16	10	3	1	20	5	2	6	0	24
8月	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0
9月	13	9	4	8	2	2	0	0	1	0	3	7	3	0	0	5	2	0	1	0	7
10月	22	12	10	10	3	2	3	1	0	3	10	4	3	2	3	5	1	4	6	0	8
11月	29	10	19	8	4	3	3	0	0	6	6	6	6	0	6	8	7	3	0	0	9
12月	13	4	9	8	2	0	2	0	0	0	4	5	2	1	1	4	2	0	1	0	5
1月	16	10	6	5	4	1	2	1	0	3	5	8	0	0	1	7	0	0	0	0	6
2月	5	3	2	2	1	1	0	0	0	0	1	3	0	1	0	3	1	0	0	0	1
3月	4	1	3	3	0	0	1	0	0	0	2	1	0	1	0	2	0	0	0	0	2
合計	346	165	181	139	48	37	47	8	2	34	141	83	53	13	20	131	53	29	39	12	112

ボランティアセンタールーム利用記録

月	利用件数(件)	利用日数(日)	利用時間(分)	利用人数(人)
4月	27	17	2685	97
5月	43	19	3410	185
6月	30	16	2155	110
7月	12	9	1090	43
8月	4	4	190	8
9月	8	5	605	36
10月	15	10	1837	62
11月	18	12	1235	81
12月	19	13	1325	74
1月	5	4	350	16
2月	2	2	140	4
3月	8	8	975	32
合計	191	119	15997	748
月平均	15.9	9.9	1333	62.3

ボランティアセンタールーム本貸出記録

年度	冊数
2013年度	48冊
2014年度	118冊

11. ボランティアセンターの取組記録

2014年4月1日～2015年3月31日

日付	内容	場所	参加者等
4/1	ボランティアステーションから「ボランティアセンター」へ呼称変更	中央大学多摩キャンパス 6号館地下1階学生課内	学生課内のボランティア専門窓口
4/7～8	学生団体新歓ブース設置	多摩キャンパス	新入生勧誘
4/15～17	学生団体新歓説明会	多摩キャンパス 6104教室	参加者合計 約80人
4/17, 18	新入生被災地スタディーツアー @女川町事前説明会	学生スタッフによる説明会 17日 後楽園キャンパス 18日 多摩キャンパス	参加合計 約55人
4/15	第1回 クリーン作戦ミニッツ	多摩キャンパス周辺	参加学生4名 職員2名
4/22～25	ボランティア活動写真展	写真展	主催：学生団体
4/23	第2回 クリーン作戦ミニッツ	多摩キャンパス周辺	参加学生3名 職員1名
5/7	第3回 クリーン作戦ミニッツ	多摩キャンパス周辺 事前勉強会	
5/9	被災地スタディーツアー事前勉強会(1)	多摩キャンパス 6104教室	ボランティア入門 チーム女川、スタディーツアー参加者
5/16	被災地スタディーツアー事前勉強会(2)	多摩キャンパス 6104教室	チーム女川、スタディーツアー参加者
5/23～25	被災地スタディーツアー	スタディーツアー 宮城県女川町	参加学生28名 (内、学生スタッフ5名) 引率職員2名
5/30	被災地スタディーツアー事後学習会(1)	多摩キャンパス 6104教室	ワークショップ チーム女川、スタディーツアー参加者
6/4	第4回 クリーン作戦ミニッツ	多摩キャンパス周辺	職員1名 学生4名
6/6	被災地スタディーツアー事後学習会(2)	多摩キャンパス 6104教室	「ラジオ」DVD上映 チーム女川、スタディーツアー参加者
6/6～8	面瀬学習支援 現地視察	気仙沼市面瀬	代替わり後の現地視察
6/14	ボランティアセンター開設1周年 記念シンポジウム 「学生だって地域のか〜災害支援 から日常への支え合いへ、学生ボ ランティアの力とわがまちの防災 力UP〜」	シンポジウム 多摩キャンパス9号館(クレセントホ ール) 主催：中央大学ボランティアセンター 共催：明星大学ボランティアセンター 協力：八王子市社会福祉協議会、日野 市社会福祉協議会 ★電通育英会助成金	第一部 講演会 講師：山中茂樹氏(関西学院大教授) 第二部 パネルディスカッション コーディネーター：中澤秀雄教授(法) 登壇者：渡戸一郎(明星大教授) 手塚文裕さん (法・2 はまらいんや代表) 齋藤元気さん (明星大 教・3 Fine代表) 日野社協・宮崎氏 八王子社協・西田氏 参加者 約100人
6/19	防災講座「DIG」	多摩キャンパス 5504教室 ★電通育英会助成金使用	講師：宮崎賢哉氏(災害救援ボラン ティア推進委員会) 参加人数：20名
6/20	ボランティアマナー講座	多摩キャンパス 6501教室	講師：ボランティアセンター職員 参加人数：6名
6/21	クリーン作戦2014	多摩キャンパス周辺	中大生：11名 明星大生：3名 職員：2名
6/30	防災リーダー育成講座 「大川小の教訓から学ぶ、学校防 災について」	多摩キャンパス 3254教室 ★電通育英会助成金使用	講師：佐藤敏郎先生(東松島第二中学校 教諭) 参加人数：約20名
7/4	女川スタディーツアー報告会	多摩キャンパス 6104教室	有志による報告会
7/9	平山法学部教授の授業でのプレゼ ンテーション	多摩キャンパス	発表者：「はまらいんや」手塚文裕さん
7/9	夏季ボランティア説明会	多摩キャンパス 6103教室	夏季ボランティア説明会 参加者：約60名

日付	内容	場所	参加者等
7/9	NPOアスヘノキボウ 中村氏による講演会	多摩キャンパス 6103教室	講師：NPO法人アスヘノキボウ 中村志郎氏 参加人数：約15名
7/10	夏季ボランティア説明会（理工）	後楽園キャンパス 6413教室	参加者：約10名
7/12	2014年度学生団体 決起会	多摩キャンパス 6102教室	評価員：学生部山ノ井事務長、石橋課長、中澤法学部教授、日野社会福祉協議会・宮崎氏 参加4団体
7/17	日野市立南平高等学校での防災講座「HUG」	日野市南平高等学校	コーディネーター出講
7/22	関東6大学ボランティア連絡協議会	多摩キャンパス 1409A会議室	参加者：5大学14名 幹事校：中央大学
8/4	夏季ボランティア 事前勉強会	多摩キャンパス 6408教室	参加者：夏ボラ参加者
8/5	夏季ボランティア 事前勉強会（後楽園キャンパス）	後楽園キャンパス	参加者：夏ボラ参加者
8/5～8/7	2014年度災害救援ボランティア講座	上級救命講習 多摩キャンパスCスクエア中ホール 立川防災館	災害救援ボランティア推進委員会 参加者：17名
8/8	防災講座「防災ゲーム クロスロード」	多摩キャンパス 6408教室 ★電通育英会助成金	講師：災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉氏 参加者：12名
8/23	信行寺・還燈会でのボランティア報告	春秋苑（生田）	学生：1名 職員：2名
8/30	大学生と地域で防災力UP「災害図上訓練DIG」	平山季重ふれあい館（日野市平山地区） ★電通育英会助成金	講師：災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉氏 参加者：74名
9/2～9/4	2014年度夏季ボランティアボラセン主催：防災学習ツアーバス	夏季ボランティア 気仙沼市、女川町 南三陸志津川自然の家	参加学生：20名 引率教職員：3名
9/8～9/13	2014年度夏季ボランティア大学連携間災害ネットワーク主催：石巻・女川復興支援インターン	夏季ボランティア 石巻市、女川町	参加学生6名（男3、女3） 引率職員：2名
8、9月	2014年度夏季ボランティア学生団体 ・はまらいんや ・面瀬学習支援 ・チーム次元 ・はまぎくのつぼみ	気仙沼市面瀬、大島、宮古市 ★電通育英会助成金	各団体2～3クール実施 参加：約45名
9/27	夏季ボランティア振り返り会（学生団体）	多摩キャンパス	法学部・中澤教授による「伝える力講座」を実施 学生：約15名
10/19	ひの市民活動フェア	日野市ふれあいの森ホール	参加学生 約15名 引率職員 2名
10/21～28	ボランティア写真展・夏ボラ報告会	多摩キャンパス中央図書館1階	夏ボラ参加者
10/26	ホームカミングデーでの活動紹介	多摩キャンパス中央図書館1階	来場者：約100名
10/26	夢ふうせんバザーでの物産展	日野市	有志教員、学生による活動（2013年度春季インターンボランティア参加学生）
10/30～11/2	白門祭での出展 チーム次元、チーム女川	多摩キャンパス	
11/8	父母懇談会 キャンパスライフ体験談でのボランティア報告	多摩キャンパス1号館	報告学生：9名 来場者合計：約40名
11/10	大学生と地域で防災力UP「避難所運営ゲームHUG」	日野市平山小学校 ★電通育英会助成金	講師：災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉氏 参加者：65名
11/15	大学生と地域で防災力UPひらやま減災ウォークラリー～めざせ！ぼうさいリーダー～	日野市平山小学校、平山地域 ★電通育英会助成金	主催：減災ウォークラリー実行委員（学生） 共催：中央大学ボランティアセンター、明星大学ボランティアセンター、日野市社会福祉協議会 参加者：約180名

11. ボランティアセンターの取組記録

日付	内容	場所	参加者等
11/16	第9回宮古市社会福祉大会での授賞式参加 学生団体「はまぎくのつぼみ」	岩手県宮古市	学生：1名 引率職員：1名
11/17	ボランティア報告会 夏ボラ・女川インターン	多摩キャンパス	有志による報告
11/17～21	東北物産展 ・「はまぎくのつぼみ」	多摩キャンパス 中央大学生協店舗	
11/22	クリーン作戦2014	多摩キャンパス周辺	中大生：16名 明星生：3名 職員8名
11/22	ボランティア傾聴講座	多摩キャンパス 学生部委員会室	講師：NPOパートナーシップ アンド リスニング アソシエーション 代表 後庵正治氏 参加学生：7名 職員：3名
11/29	ボランティア情報交換会 (中大・明星大、専修大、上智大)	多摩キャンパス 学生部委員会	参加学生：約15名
12/5～7	冬季ボランティア視察 学生団体「面瀬学習支援」	宮城県気仙沼市面瀬	学生：15名
12/5～7	春季ボランティア視察 「チーム女川」	宮城県女川町	学生：7名 引率職員：1名
12/11	春季ボランティア説明会	多摩キャンパス 7101教室	参加：約30名
12/12,13	東北学院大学シンポジウム	東北学院大学土樋キャンパス	報告学生：2名 職員：2名
12/13～14	冬季ボランティア視察 学生団体「はまらいんや」	宮城県気仙沼市面瀬 ★電通育英会助成金	学生：2名
12/18	災害ボランティア入門講座	後楽園キャンパス	講師：一般社団法人ピースボート災害ボ ランティアセンター 参加者：8名
12/19	震災から学ぶ「まちづくり講演会」	後楽園キャンパス	講師：ランドブレイン株式会社株式会社 石村 壽浩氏 参加者：7名
12/20	NPO阪神高齢者・障害者支援ネット ワーク理事長・黒田裕子氏を偲 ぶ会出席 及び阪神淡路大震災の研修	神戸市	学生：5名（はまらいんや所属） 教員：1名 講師：村井雅清氏（被災地NGO協働セ ンター）
12/2, 4, 9, 11	学生団体引継ぎのためのラーニン グセッション (計6コマ実施)	多摩キャンパス	講師：株式会社ラーニングイニシアティ ブ 浅野高光氏 参加者：延べ45名
12月、 2015年1 月	2014年度冬季ボランティア 学生団体 ・はまらいんや ・面瀬学習支援	宮城県気仙沼市面瀬地区 ★電通育英会助成金	学生20名
1/8	春季ボランティア 女川スタディーツアー説明会	後楽園キャンパス	
1/9, 14	春季ボランティア 女川スタディーツアー説明会	多摩キャンパス	参加者：約20人
1/16	春季ボランティア 復興支援インターン説明会	多摩キャンパス	参加者：約20人
2/6～8	ボランタリーフォーラム2015	飯田橋	学生1、職員2
2/9	春季ボランティア 事前勉強会	多摩キャンパス	講師：浅野高光氏（(株)ラーニング・イ ニシアティブ） 学生：30名
2/10	傾聴講座	多摩キャンパス	講師：山科満教授（文学部） 学生：8人
2/14～17	春季ボランティア 女川スタディーツアー	宮城県女川町	学生13名、職員1名
2/16～21	春季ボランティア 阿部長インターン	企業先：(株)阿部長商店	学生6名、教職員3名
2/22～28	大学間連携ネットワーク 復興支援インターン	企業先：(株)岡清、(株)ワイケイ水産、 (株)ヤマホンパイフーズ	主催：復興大学 共催：復興庁 学生8名、教職員2名

日付	内容	場所	参加者等
2/25~27	第3回学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会 学生ボランティアフォーラム	国立オリンピック記念青少年総合センター	学生1、職員1
3/3~6	FOODEX JAPAN2015 (阿部長商店出展)	幕張メッセ	阿部長インター参加学生5、教職員3
3/5~11	東日本大震災被災地支援大学生ボランティア活動報告パネル展	イオンモール多摩平の森(日野市多摩平)	参加団体：明星大学減災プロジェクトFine、虹色の薔薇の会、明星大学ボランティアセンター学生有志、中央大学ボランティアセンター「チーム女川」、中央大学被災地支援学生団体、復興支援インターンシッププロジェクト、実践女子大学東日本大震災岩手県宮古市支援プロジェクト、東京薬科大学ボランティア団体I V O L E A、日野市ボランティア・センター 来場者：約1500人
3/7	社会福祉法人日野市社会福祉協議会「第30回福祉のつどい」	日野市民会館ひの煉瓦ホール	減災ウォークラリー実行委員 中大生2人、明星大生2人受賞
3/8	ボランティア報告会 地域防災力UPイベント「避難所運営ゲームHUG」	イオンモール多摩平の森(イオンホール)	参加者：約20人
3/11	チャリティーコンサート内でのボランティア報告	イオンモール多摩平の森(イオンホール)	来場者：約300人
3/18	世界防災会議での学生報告	宮城県仙台市	報告学生1名 パネル展示：チーム次元
2月、3月	2014年度春季ボランティア学生団体 ・はまらいんや ・面瀬学習支援 ・チーム次元 ・はまぎくのつぼみ(視察)	宮城県気仙沼市面瀬、大島、岩手県宮古市	学生28人、引率職員1人

2015年3月31日現在

12. 協力・連携・助成金

(1) 協力・連携

〈順不同・敬称略〉

大学連携間災害ボランティアネットワーク（拠点校：東北学院大学）※2011年加盟
明星大学ボランティアセンター
日野市社会福祉協議会
八王子市社会福祉協議会
災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉
NPO法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク理事長 黒田裕子（故人）
NPO法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク所属の看護師の皆さん
NPO法人日本ホスピス・在宅ケア研究会所属の看護師の皆さん
気仙沼市議会議員 佐藤輝子
気仙沼市議会議員 今川悟
面瀬中学校仮設住宅自治会 尾形修也会長
上沢三区自治会
上沢三区自治会婦人部
面瀬地区振興協議会
面瀬地区まちづくり協議会長 藤田正人
宮城県気仙沼西高等学校 小山和美 ボランティア部
気仙沼あそびーばーの会
気仙沼復興豆腐のマサキ食品 千葉淳也
気仙沼高校 佐藤海人
気仙沼高校 高橋誠子（元）教諭
面瀬小学校元校長 長田勝一
面瀬地区自治会長連絡協議会 佐藤正儀会長
NPO法人NEO（なんでもエンジョイ面瀬クラブ）小池良光理事長
面瀬地区下沢自治会 神谷和馬会長
面瀬地区千岩田自治会 梶谷正常会長
気仙沼市千岩田在住 小野寺憲雄・憲一
気仙沼市千岩田在住 小野寺征貴
面瀬地域ふれあいセンター 中井充夫館長
気仙沼市反松公園仮設住宅
気仙沼市気仙沼中学校住宅自治会
気仙沼市気仙沼公園住宅自治会
気仙沼市立面瀬小学校
気仙沼市立面瀬中学校
三陸新報社 小野寺英彦編集局長
リアス・アーク美術館 山内宏泰学芸員
本吉響高校 千田健一校長
気仙沼市松岩 煙雲館
宮古市社会福祉協議協会
宮古市役所
清寿荘在宅介護支援センター
鍬ヶ崎学童の家

みやこ災害FM 佐藤省次
熱血！気仙塾 塾長 武蔵和敏
気仙椿ドリームプロジェクト 佐藤武志
社会福祉法人大洋会 青松館
宗教法人信行寺 浅野弘毅
中央大学学会
女川桜守りの会のみなさま、遠藤定治会長、藤中郁生
女川町観光協会 遠藤琢磨、阿部真紀子
いのちの石碑プロジェクト 阿部一彦
小さな命の意味を考える会代表 佐藤敏郎
女川町立女川中学校
女川町教育委員会
女川魚市場買受人協同組合
女川さいがいFM
きぼうのかね商店街のみなさま
ダイシン／カフェさくら 島貫洋子
小野寺茶舗 小野寺武則
Cebolla 堂賀みつえ
RIVER SON 川村辰徳
金華楼 鈴木康仁
認定NPO法人カタリバ コラボ・スクール女川向学館
トレーラーハウス宿泊村 EL FARO 佐々木里子
株式会社高政
有限会社梅丸新聞店
有限会社マルキチ阿部商店
ワイケイ水産株式会社
株式会社岡清
株式会社ヤマホンベイフーズ
東北復興応援団白金支部
気仙沼復興マルシェ 塩田賢一
大島公民館長 小野寺樹一郎
気仙沼大島 マルエ水産 小松俊浩
気仙沼大島 旅館民宿のみなさま
NPO法人相馬はらがま朝市クラブ理事長 高橋永真
宮城県志津川自然の家
関西学院大学災害復興制度研究所 山中茂樹
NPO法人P.L.A 後庵正治
被災地NGO協働センター 村井雅清代表
東京ボランティア・市民活動センター
岩手県奥州市役所 渡辺和也政策企画課長
復興支援奥州ネット 大江昌嗣代表、浪越和彦副代表以下の皆さん
岩手県奥州市 社会福祉法人福寿会
株式会社フジミツ岩商
株式会社阿部長商店
株式会社八葉水産
GANBAARE株式会社
日野市役所
日野市民活動団体連絡会

12. 協力・連携・助成金

日野市立平山小学校
社会福祉法人夢ふうせん
日野市青少年委員の会

(2) 協定

- 2014年3月12日「日本財団学生ボランティアセンター」との間で「学生ボランティア活動推進」に関する協定の締結

(3) 助成金

- 公益財団法人 電通育英会 平成26年度「人材育成活動への助成事業」に採択
プロジェクト名：「復興支援活動を通じた、地域防災リーダー育成プロジェクト」
被災地域での支援活動を継続しながら、災害の教訓を集めて整理し本学所在地域などに還元するための「防災ゲーム」を開発する。その作成過程で学生の防災力及びリーダーシップを高め、防災リーダーの育成を目指す。
対象団体：被災地支援学生団体「はまらいんや」、「はまぎくのつぼみ」の活動
- 住友商事平成26年度「東日本再生ユースチャレンジ・プログラム」活動・研究助成Aコースに採択
対象団体：被災地支援学生団体「面瀬学習支援」の活動

HAKUMON Chuo

2014早春号

学生記者コラム ● セルフプロデュース さよならを言う前に

彼女の4分、私の4年

文と写真 学生記者 白倉隆之介(法学部4年)



県庁内に活動し始めた、ボランティアサークル「はくもんちゅう」の仲間たち(一)。2013年11月、商業中校仮設住宅事務所にて

「長かったというか、あっという間でした。」
先日のソチオリンピックで有終の美を飾った浅田真央選手が、4年前のバンクーバーオリンピックの演技終了後インタビューで答えた第一声だ。浅田選手の4分間、私の4年間、背負っているものは比べ物にならないが、大学卒業を目前にして、彼女が放った言葉の意味を改めて噛みしめている。

「震災」に突き動かされて

2011年3月11日、私は専攻中の故郷・宮城県気仙沼市で東日本大震災に遭遇した。幸いながら私の家族は全員無事だったが、その衝撃は当時18歳だった私が受けてきた衝撃、人生観を軽々く覆すものだった。以来、3年余り、「震災」ということで突き動かされ、様々な出会いや経験を経て、今の自分がある。

思えば、震災前まで「生死」について深く考えたことは

なかった。まして、年頃の10代男子が死について友人と語り合うなんてことなど一度もない。祖父の地帯はあったものの、家族に看取られながらの永眠だったため心の準備があった。一方、先の東日本大震災では、朝、元気に出勤していたはずの家族・友人が一瞬にして毎らぬ人になってしまった。中学の同窓の先輩、教諭をしている母のかつての教え子の訃報を聞いたとき、私が思ったのは、「生の世界」と「死の世界」は遠いようで近い」ということだった。誤解を恐れずに言えば、「人間、死ぬ時は家外簡単に死ぬんだ」という方が近いかもしれない。もしあの時、沿岸部を走っていった津波に巻き込まれていたら一人ごとは思えず、怖くなった。

死がいつ来るかは誰にも分からない。でも、死に怯えていても何もできない。それなら、ひたすら目の前の日々を精いっぱい生きることだけを考えよう。気持ちが高ぶらざるま、生かされた者として感謝のために何か力になりたいという思いが湧いてきた。

♪ あんな時代もあったねと きっと笑って話せるわ

～時代 中島みゆき～1975

“地域”を見つけてきた

本学法学部の中津孝輝教授が気仙沼に縁あって、2011年11月、気仙沼市立商業中校仮設住宅でボランティア活動を開始した。2012年4月からは団体(サークル)として活動し、2013年度からは新しく1、2年生の後輩達5人が加わり、昨年の年末年始も1週間もわたってボランティア活動を展開することができた。

活動の詳細は総稿(230号)に書かせて頂いた通りだが、現在もお宅や集会所でお話を伺う。継続ボランティアに力を入れている。かねて「継続が大切」という言葉を様々なところで言い続け、活動を続けてきた以上、自分の言葉には責任を持ちたかった。本当に微力ではあるが、途中で投げ出さずにここまで続けられたことは良かったと思う。

地域は日々、移りゆく。震災から3年が経過し、経済的理由を含め、諸々の事情を抱えている方は今なお仮設住宅に居住し、災害公営住宅(復興住宅)の完成を待っている。一方で、新しい自宅を自力再建して仮設住宅を出る方が増えてきた。仮設住宅には空室が目立つ。歩いて回るだけでも、地域コミュニティの姿、形が変化しつつあることが感じられる。

したがって、ボランティア活動においても、今までやってきたことをただ続けるだけでなく、もう一度、今住んでいる皆さんとのニーズを的確に抽出して、それを活動に反映させていなければならない。サークルの後輩達には、ぜひ柔軟な発想で新しいチャレンジをしてほしいと思う。

世界が広がり、自分が見える

ボランティア活動をしていく中では、現地の活動中はもちろん、東京に戻ってからの発表や報告会などで多くの人に会うことができた。学生、社会人、リタイアされた方、

いろいろな方がいたが、皆さんに共通して言えるのは、とても生き生きとされていて、人間的な魅力を持っていらっしゃるということだった。出会いの度、自分の世界が一つ、またひとつと広がっていきような気がして、すごワクワクしたと今でも覚えている。

そうした中で将来の方向性も見えてきた。私は、自分が思っていたよりも「人」が好きで、新しい環境に飛び込んでいくことが好きな人間のようなのだ。加えて、仮設住宅という地域を見つけてきた結果、社会の中の制度的課題や法的課題に直接向き合えるような公共性の高い仕事をしたいという思いが一段強くなった。

私は行政官の道を選んだ。大学院進学、NPO等の非営利組織で働くという選択肢もあったが、国家公務員の立場から地域や社会の課題に向き合い続け、この国を支えたいかと思えた。人畜する公務員では、転勤を繰り返しながら地方自治に関連する仕事にあたることになるが、大学時代に培った経験を活かして、公務員を志した初心を忘れず職務に臨んでいきたい。

旅立ちを前にして

私は浅田選手のように世界を駆け回ることはできなかった。ただ、私は気仙沼市一つの地域に根を張り、ボランティア活動を続けることができた。中央大学におけるボランティア文化をほんのわずかながら継承することができたという「自信」は、これからの人生の中で私を支える大きな力になるだろう。

そして、私の活動を支えてくださった方々や、苦難をともにした友人たちには心からの感謝を表したい。出会い、そこから得られた経験は何物にも代えがたい財産であり、これらも大切にしていきたい。

そんな様々な思いを胸に、私は今、この学び舎を旅立つ。

2014春号

東日本大震災【被災地レポート】

被災島民復興の



ボランティア学生奮闘記

優秀学生大賞受賞の安原元樹さん

中央大学に、権威ある団体から社会貢献分野で「優秀学生」と認められ、さらには「大賞」を受賞した学生がいる。総合政策学部4年の安原元樹さん(宮城県出身)だ。東日本大震災で自らも被災しながら、気仙沼市の対岸にある島、「大島」の復興に寄与した。

独立行政法人・日本学生支援機構は昨年12月7日、平成25年度の優秀学生表彰・社会貢献分野で大賞を受賞した中央の安原元樹さんを表彰した。中大生が同分野で受賞するのは初めてだった。

日本学生支援機構とは、日本育英会の事業を継承している歴史ある団体。毎年、学術・スポーツ分野で優れた業績・成績を残した学生を表彰する。中大からは2人が大賞を受賞した。もう一人はスポーツ分野の塩浦慎理選手(水泳部50m・100m自由形・法学部、2014年3月卒業)で、日本選手権50m自由形を日本記録で制したほか、世界選手権の活躍が認められた。優秀学生表彰には全国から998人の応募があった。



表彰式(授賞式)、中央大学(左)と安原元樹さん

2011年3月11日、安原さんは学費や入学前資金の一部を稼ぐため、山形県の缶詰工場アルバイトをしていた。1年間浪浪して中大合格を決めた。

「休職期間でした。ワセダ構帯で映像を見た。もう…」
作業は中止となり、工場バスで仙台駅へ向かった。

「山全体が真っ暗でした。仙台駅周辺で下ろされ、そこから家まで歩きました。仙台駅は東京の例に漏れず閉鎖となって交通機関はストップ。家まで10ほどは距離に時間がかかりました。」「

「絶望の中にも、希望の光が射したと、涙も出てこない。どうなるんだろう

…でも…、なんとかなるわい(けい)

公民館からチラシを借って、給水所には被災者の長い列の屋根取りわたりした。「最初のうちは何をしたらいいのかわからなかった。」「災害ボランティアの情報を聞き、友人と祖父伯母とともに名松島へ赴きに行きました。仙台市にボランティアセンターが立ち上がり、それがきっかけで何をしたらいいのかわからなかった。」「

学費援助を引き受けてくれた祖父も被災した。学費は急ぎきつなると、補修費に回すことになった。

「大学にはいけない」「あきらめかけていた気持ちで中大へ電話をかけた。事情を話すと「お金のことは心配しないでいいですよ。東京まで来てください。何とかします」と職員が話してくれた。」「

上京するまでに多くの人の力を借りて、ようやく多摩キャンパスに辿り着いた。その後大学の援助を受

2011.3.11

ために働いた



学生を率いて被災地ツアーへ参加した。左は「おはなせ」、右は「はくもんちゅう」のメンバー(2011年11月)

け、住みでは被災地住民の絶大な支援を頂いた。引継ぎにも大学職員が車で駆け付けてくれた。

ボランティアのサークルへ

「無事入学して、僕がすることは勉強です。震災の避難所でも、大学進学を応援していただいた。サークルは入学前から「国際ボラ

ンティアサークルひびく」と決めていた。

「気になる東北へはゴールデンウィークに石巻へ、東松島へも6月に再び東松島へ、まだ残る泥を処理した。」「

気仙沼市内のボランティアセンターで、活動するためのネットが張られると聞いた。前期試験終了の翌朝から自らのオートバイで約10時間かけて気

仙沼入りした。125ccの小さなスクーターに荷物はいっぱい詰め込んだ。自慢の400ccオートバイは入学金の足しにしたため、やむなく売却していた。7月末から同市内でネットを張り、ボランティア活動を始めた。8月初旬、中大からも夏休みを利用した震災ボランティアが大島へ向かっていた。気仙沼市内で合流すると、中大バスの

東日本大震災【被災地レポート】被災地復興のために働いた 優秀学生大賞受賞の安原元樹さん

後ろを追いかけられたりになった。バスではスクーターが活躍になったように、「何者だ」。事情を知った中大ボランティアがびびりしたのはいうまでもない。

中大勢が活動を終えた後も、安原さんは気仙沼市内に一人残った。相変わらずのアルバイト生活。市内に2週間滞在し、お昼休みに仙台市へ帰る。休みが明けると再び大島へ帰った。ここで10日間過ごす。

「長いと大勢の人に会います」

地元島民の多くが被災した。家族の行方が分からず、漁業の仕事を手伝いながらも、被災した人たちのために黙々と働く地元の方々。

人がいいもほどがあるというので、面白いなく「おほか隊」と呼ばれるようになった。

れがきの撤去ひとつとっても、気仙沼市内で処理するより煩雑だ。ボラはオラス。木柄は木柄、電化製品も…。大量のれがきのなかから個々に分別しなければ島外へ運び出せない。

無口だけど熱い心の「おほか隊」に共感した。ふるさとを思う自分と同じである。

島を支える「おほか隊」が時に涙を見せる。いまでも壊れてしまっている人たちの学生なりに手助けできないものか。

猛勉強した浪人生活

「高校は仙台で偏差値の低い学校です。中央大学の存在も知りませんでした」

オートバイに夢中になり、その購入費捻出のためアルバイトをする日々。ボランティアは学校が推薦しており、規定時間を活動すると単位修得となる。



「ほかに草むしりや障がい者を福祉施設に誘ったりする程度で、内中を上げるために生徒会に入る。勉強もテスト前にするだけでした」

経済的事情から受験は国立公立大学とした。

元教師の祖父にまごかれ、教師になろうと福島大などを受験したが、残念な結果になった。父親に頼り込み、予備校へ通った。ここで自分を見つめ直したという。

「教師となって自分のような高校生を相手にできるのか。子供は好きか。疑問が出てきて、何がやりたいのか考えた。これまでの自分を振り返ると、やりたいというより、自然とできるのがボランティアだった。人の助けになるようなことがしたい」

不合格は高校時代にさほど勉強していなかったからだ。

「浪人時代は1日13〜14時間勉強しました。朝8時に予備校が開いて、夜8時に閉まるまで、帰宅後は英単語を1時間、休んだのは1日だけ、友だちと遊んだ日でした」

勉強は基本から学んだ。苦手だった英語、数学が伸びた。成績はみるみる上がり、MARCH(明治、青山学院、立教、中央、法政)合格圏に入った。予備校で「中央大学入学説明会」があり、参加した。

「教師となって自分のような高校生を相手にできるのか。子供は好きか。疑問が出てきて、何がやりたいのか考えた。これまでの自分を振り返ると、やりたいというより、自然とできるのがボランティアだった。人の助けになるようなことがしたい」

不合格は高校時代にさほど勉強していなかったからだ。

「浪人時代は1日13〜14時間勉強しました。朝8時に予備校が開いて、夜8時に閉まるまで、帰宅後は英単語を1時間、休んだのは1日だけ、友だちと遊んだ日でした」

勉強は基本から学んだ。苦手だった英語、数学が伸びた。成績はみるみる上がり、MARCH(明治、青山学院、立教、中央、法政)合格圏に入った。予備校で「中央大学入学説明会」があり、参加した。

学生には夢がある。彼と話すとき、自分も明るい気分になれるというのだ。

安原さんは、学生とともに大島へ行く(震災ボランティア)を考えた。第1回クルーは10月後半にスタートした。先方の受け入れ態勢から参加は5〜6人にとした。

自動車の運転免許をとった。それまで移動はオートバ

イ中心だったが、125ccのバイクで複数人の移動はさすがに無理だ。レンタルを利用した。日程は授業期間中が週末利用の泊2日、長期休暇中は泊3日泊4日泊5日泊とし、参加費は一人3000円。

現地では、れがきの撤去、軽軌の要請の手伝いといった島民の要望を聞きながらの行動となる。子供を対象とした学習支援は2012年夏から始まった。2013年には特産「柿」栽培の手伝いをした。

「大島の人は心温かい。学生が島を離れるとき、フェリーまで見送りに来てくれる。数日間とはいえず、学生が変わっていくのが分かってきた」

彼らからにかけてはボランティアが減っていく。支援活動を続けさせてほしいと考える安原さんに、参加者が新たな参加希望者を紹介してくれた。

白門館のころ、中古車を買った。7人乗りミニバン。12月まで実施した4回クルーで、活動費レンタル代、高速代、ボラ引代に20万円の赤字が出ていた。第4回はミニバンレンタルが加わって総勢12人と

「おほか隊」が時に涙を見せる。いまでも壊れてしまっている人たちの学生なりに手助けできないものか。

「おほか隊」が時に涙を見せる。いまでも壊れてしまっている人たちの学生なりに手助けできないものか。

2011.3.11



学生を引継いで行く被災地ツアー活動(2012年10月)



ボランティアで出動した特産「柿」栽培の手伝い(2013年8月)

か考えた。これまでの自分を振り返ると、やりたいというより、自然とできるのがボランティアだった。人の助けになるようなことがしたい」

不合格は高校時代にさほど勉強していなかったからだ。

「浪人時代は1日13〜14時間勉強しました。朝8時に予備校が開いて、夜8時に閉まるまで、帰宅後は英単語を1時間、休んだのは1日だけ、友だちと遊んだ日でした」

勉強は基本から学んだ。苦手だった英語、数学が伸びた。成績はみるみる上がり、MARCH(明治、青山学院、立教、中央、法政)合格圏に入った。予備校で「中央大学入学説明会」があり、参加した。

学生には夢がある。彼と話すとき、自分も明るい気分になれるというのだ。

安原さんは、学生とともに大島へ行く(震災ボランティア)を考えた。第1回クルーは10月後半にスタートした。先方の受け入れ態勢から参加は5〜6人にとした。

自動車の運転免許をとった。それまで移動はオートバ

イ中心だったが、125ccのバイクで複数人の移動はさすがに無理だ。レンタルを利用した。日程は授業期間中が週末利用の泊2日、長期休暇中は泊3日泊4日泊5日泊とし、参加費は一人3000円。

現地では、れがきの撤去、軽軌の要請の手伝いといった島民の要望を聞きながらの行動となる。子供を対象とした学習支援は2012年夏から始まった。2013年には特産「柿」栽培の手伝いをした。

「大島の人は心温かい。学生が島を離れるとき、フェリーまで見送りに来てくれる。数日間とはいえず、学生が変わっていくのが分かってきた」

彼らからにかけてはボランティアが減っていく。支援活動を続けさせてほしいと考える安原さんに、参加者が新たな参加希望者を紹介してくれた。

白門館のころ、中古車を買った。7人乗りミニバン。12月まで実施した4回クルーで、活動費レンタル代、高速代、ボラ引代に20万円の赤字が出ていた。第4回はミニバンレンタルが加わって総勢12人と

「おほか隊」が時に涙を見せる。いまでも壊れてしまっている人たちの学生なりに手助けできないものか。

「おほか隊」が時に涙を見せる。いまでも壊れてしまっている人たちの学生なりに手助けできないものか。

「おほか隊」が時に涙を見せる。いまでも壊れてしまっている人たちの学生なりに手助けできないものか。

2014夏号

東日本大震災【被災地レポート】被災地復興のために働いた 優秀学生大賞受賞の安原元樹さん

なっていた。

「学生からあまり高くは評価され、電話で英会話や住友商事などから支援を受けるまでになった。

「僕は協調性とか団体行動が苦手で、一人で行動してきました。大島の人たちと触れ合って、人のよさにじんときて、綺麗な風景もあって、ボランティア志望の学生を連れていきたいと思う気持ちから始まったのが、確立されました」

宮城県大島への気持ちを持ちながら、安原さんはいま、東南アジアのタイ北部へ目を向けている。貧困層の子供たちを人身売買から保護するNGO(非政府組織)でボランティア活動をするためだ。

(写真提供=本人)



【プロフィール】
安原元樹さん
http://genkiy.asia.com/team/genki.html

から次元と呼ばれ、その集まりをチーム次元と命名した。参加者は中大に限らず、創価大、早大、東京経済大、神田外語大など広がりを見せている。

週末や夏休み、春休みを利用して参加者は100人を超えた。大島と学生の結び付きは深まり、活動内

なっていた。

「学生からあまり高くは評価され、電話で英会話や住友商事などから支援を受けるまでになった。

「僕は協調性とか団体行動が苦手で、一人で行動してきました。大島の人たちと触れ合って、人のよさにじんときて、綺麗な風景もあって、ボランティア志望の学生を連れていきたいと思う気持ちから始まったのが、確立されました」

宮城県大島への気持ちを持ちながら、安原さんはいま、東南アジアのタイ北部へ目を向けている。貧困層の子供たちを人身売買から保護するNGO(非政府組織)でボランティア活動をするためだ。

週末や夏休み、春休みを利用して参加者は100人を超えた。大島と学生の結び付きは深まり、活動内

なっていた。

「学生からあまり高くは評価され、電話で英会話や住友商事などから支援を受けるまでになった。

「僕は協調性とか団体行動が苦手で、一人で行動してきました。大島の人たちと触れ合って、人のよさにじんときて、綺麗な風景もあって、ボランティア志望の学生を連れていきたいと思う気持ちから始まったのが、確立されました」

宮城県大島への気持ちを持ちながら、安原さんはいま、東南アジアのタイ北部へ目を向けている。貧困層の子供たちを人身売買から保護するNGO(非政府組織)でボランティア活動をするためだ。

週末や夏休み、春休みを利用して参加者は100人を超えた。大島と学生の結び付きは深まり、活動内

なっていた。

「学生からあまり高くは評価され、電話で英会話や住友商事などから支援を受けるまでになった。

「僕は協調性とか団体行動が苦手で、一人で行動してきました。大島の人たちと触れ合って、人のよさにじんときて、綺麗な風景もあって、ボランティア志望の学生を連れていきたいと思う気持ちから始まったのが、確立されました」

宮城県大島への気持ちを持ちながら、安原さんはいま、東南アジアのタイ北部へ目を向けている。貧困層の子供たちを人身売買から保護するNGO(非政府組織)でボランティア活動をするためだ。

週末や夏休み、春休みを利用して参加者は100人を超えた。大島と学生の結び付きは深まり、活動内

なっていた。

「学生からあまり高くは評価され、電話で英会話や住友商事などから支援を受けるまでになった。

「僕は協調性とか団体行動が苦手で、一人で行動してきました。大島の人たちと触れ合って、人のよさにじんときて、綺麗な風景もあって、ボランティア志望の学生を連れていきたいと思う気持ちから始まったのが、確立されました」

宮城県大島への気持ちを持ちながら、安原さんはいま、東南アジアのタイ北部へ目を向けている。貧困層の子供たちを人身売買から保護するNGO(非政府組織)でボランティア活動をするためだ。

週末や夏休み、春休みを利用して参加者は100人を超えた。大島と学生の結び付きは深まり、活動内

ボランティヤセンター設立1周年

「学生だって地域の力」記念シンポジウム開催

学生のボランティア活動を支援する中央大学ボランティヤセンターが設立1周年を迎え、6月14日、多摩キャンパスで記念シンポジウムを開いた。

同センターは昨年4月1日にスタート。東日本大震災で被災した岩手県古市や宮城県気仙沼市など各地の復興支援活動に継続的に取り組んでいる。

震災から4年目となり、世間では震災の記憶が風化する一方だが、中大は1年生も続々と活動に加わり、5月月の被災地スタディツアーには22人が参加した。

学生の活動先は、岩手県古市、大島町、宮城県気仙沼市、南三陸町、女川町、石巻市、仙台市、福島県相馬市の8町村に広がる。この1年で31回、延べ225人が参加した。

学生たちは現地での復旧の遅れや人々の悲しみを目の当たりにし、自分が見て考えることの大事さに気付く。現地の人と共に新たな街づくりを、現地に還元し続けている。

ボランティヤセンターでは、「クリーン作戦」として、ゴミ拾い運動を9回実施。連べ59人が街をきれいにした。展示発表などのイベントも15回開き、連べ187人が運営に携わった。

●

シンポジウムは「学生だって地域の力」をスローガンに、「災害から日常の支え合いへ、学生ボランティアの力とわがまちの防災力UP」と題し、明大ボランティヤセンターとの共催。八王子市と日野市の社会福祉協議会の協力を得た。

福原記念学長長官復興委員会あきつのは、関西学院大災害復興制度研究所の山中茂樹氏がこれまでの災害から考える、事前復興という街づくりをテーマに基調講演。その後、中大法学部の中澤秀雄教授をコーディネーターに、学生ボランティアの力について討議した。

会場座席には、非常用飲料水と備食カンパンを用意され、災害に備える。被災と向き合う姿がクローズアップされていた。

2014夏号

①②③「きのうきょう」

女川町訪問記録

文・写真 学生記者 中村亮士(商学部2年)



今春、ようやく私は決心した。私は、東北に足を踏み入れることに決めた。私は3月に中央大学学生記者団を企画した「被災地スタジアムツアー」で宮城県女川町を訪ねた。

女川町は、東日本大震災により壊滅的な被害を受けた場所だ。ここには何もない。震災から5年がたち、いわゆる「復興」がどこまで進んでいるのかわかり、自分の目で見よと思ひ、応募した。

ツアーに参加する以前の私は、被災地へ出てそれなりに学び、サークル行き、適度に遊び、アルバイトをするような生活だった。

資格取得の勉強をするだけでなく、インターンや留学など自分プラスになるであろうこともしていない。自分が訪れるような活動を、大学生活の中で何もしていないことに気が付いた。

「震災のあった東北に行ってみよう」とは思っていたので、そんな活動はないだろうか、と情報を探したことはあった。

これまで現地へ足を踏み入れたことはなかった。自分から踏み込む勇気が足りなかったように思う。しかし今回は、東北の現状を知りたい、また自分が成長するために、やるなら今しかないという思いが強く、私はやっとなツアーを起した。こうして、ツアーに参加することになった。

女川町では住民の方々に震災当時のこと、復興への考え方を話していただいた。町の中がなくなっているのを見て回った。現地の方は優しく接してくれた。料理はおいしかったし、宿泊場所の雰囲気も良かった。とても良い町だった。

ツアーを通して感じたのは、まず、私は多くのことについて無知であった。例えば、行く前は、現地の写真を見て、「復興は年々進んでいっていいんじゃないか」と思っていた。

しかし今は、今後津波が来て被害を減らせるように、かまきけをしている最中で、工事が続けられていると知った。女川町は町の83%を失ったそうだが、その失った分で見守りボランティアが活躍しているという。

私は復興が遅れているという悲観や、それについてのコメントや意見を見聞きして、「復興は進んでいない」というイメージがあった。被災した方々がそう思っているケースがあるので、遅れているというのは本当なのかもしれない。

また、現地関係者が懸命に取り組んでいるのを目の当たりにし、よそ者から来た私が、その復興に「復興は進んでいない」と思ってしまうのは、今では感じている。

また、現地の方々から、「見守りの人に女川町に来ては

38

忘れない2011.3.11

いという声を多く聞いた。「今、女川町で何が起きているのか、住民がどんな気持ちで暮らしているのか感じてほしい」「何度も訪れて、前とどこが変わったか感じてほしい」と話していた。

そこで、5月末に再び女川町を訪れたのだが、2か月たっても町並みは大きく変わっていない。復興を成し遂げるにはもう少し年月が必要だろう。工事はなお続けられていたし、現地の方の懸命に取り組む姿勢は変わっていないと見えた。

だから、遠くない将来、「復興した」というのが聞けるかもしれないと感じた。そうなるのはいいと思う。これからは町が復興に向かう様子も、足を運んで自分の目で見届けたいと思った。

私が3月のツアーに参加して心に残っているのが、現地で町づくりに尽力されている方が3人いたこと。「誰かのためではなく、自分の夢のために、志を持った人間

になってほしい」という言葉だ。

「志」とは、心に決めた目標のこと。私はツアーを契機に、自分の将来について考えることができた。それを頭に焼きながら、この経験を良いステップとして、これから自分が何か訪れるようなことをしていきたいように、大学生活で努力していく。心に決めた。

最後に、皆さんは被災地支援についてどうお思いをお持ちだろうか。

これまでに支援をしてきたという人、何かしたいとは思っていても行動できずにいる人も、何もかもと後悔しながら私が後者に言えることはないが、まずは「被災地について知る」ことが大切だと思っている。

震災時何があったのかを学んで、機会があれば現地に足を運んでみて、実情を知ってほしいと思う。このコラムを見て、少しでも関心を持っていただけたら幸いです。

HAKUMON Chuo

学内配布場所一覧


●多摩キャンパス
各学部・大学院事務室
学生部
図書館
グリーンプラザ
キャリアセンター
学友会
国際センター
生活館
入学センター
央の楼

●後援キャンパス
理工学部事務室
芸術
ビジネススクール事務室

●多摩キャンパス
ロースクール事務室

●市ヶ谷キャンパス
総合インフォメーションカウンター
アカウンティングスクール事務室

●駿河台記念館
駿河台記念館1階ロビー



39

2014秋号

ニュース & 中大ニュース

阪神大震災の被災者支援

黒田裕子さん死去 73歳

中大生にはボランティア活動教える

中央大学被災地支援学生団体「はらいんぞ」が活動する、気仙沼市瀬川中学校仮設住宅で、学生たちのボランティア活動を指導・支えてきたNPO日本ホスピタル在宅ケア研究会副理事長の黒田裕子さんが9月24日、肝臓がんのため死去した。73歳だった。

黒田さんは、兵庫県塚本立病院の副院長として1995年阪神大震災時、被災者支援にあたり、その

後、NPO「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」などを立ち上げ、災害看護活動に力を注いできた。

2011年東日本大震災では、気仙沼市内で2番目に世帯数の多い仮設住宅で、365日24時間体制の見守りボランティア活動を行っていた。

新潟中越地震、トルコ、中国、四川、ハイチなど国内外で被災地支援を展開していた。

現場を変えていく勇気と志を受け取りました。それら学生の思いが成長の糧となり、2013年4月ボランティア活動を継続しているために「ボランティアスタッフ」(2014年4月センター改称)が誕生しました。黒田さんから指導を受けたことができた学生は今日まで約100人以上になります。今では瀬川の方から「中央大学の学生さん」として信頼してもらい、本音を吐き出したかったり、地域の行事に呼ばれたり、つながりが深まっています。

黒田さんがこの3年間で与えてくださったのを育て、次代につなげていけるように、学生たちと共に活動に努めていきます。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。
(ボランティアセンター コーディネーター 松本真理子)

48

黒田さん追悼コメント

「黒田さんに教えていただいた『被災者である前に一人の人間であることを忘れない』という基本姿勢を常に忘れず、後輩にもしっかりと引き継いでいきます。数々の貴重な学びを誠にありがとうございました。」
手塚文雄(はらいん代表・法学部2年)

「相手に何かしてあげられると思ったら大間違い。相手に寄り添い、気持ちを分かちあうと自分があるということが、相手にとって大事なことになるのだと、教えていただきました。」
大和田菜穂(法学部3年)

「黒田さんは私たちに『次の社会を担う者(人)』として多くの学びをくださいました。志半ばでご逝去された先生の思いを感じながら、震災後の3年間に学んだことを、仲間とともにこれからの人生と社会に生かしたいと思えます。ご冥福をお祈りいたします。」
宮崎澄菜(文学部4年)

「ボランティアとして人と向き合う上で、『被災者』ではなく、その人の暮らし、習性ももの、これまでの生きざまを受け止め、一人の人間として物心両立に向き合う姿勢を黒田さんのすべてから学ばせて頂戴しました。」
藤久重彰(法学部4年)

「時に叱られ、時に励まされ、大きな愛情で私たちが包みこんでくださった黒田さん。被災地のため、昼夜をおかず奔走するそのお姿を忘れることができません。そんな黒田さんの熱い思いを自分の中で再び目撃でき、情いっぱい職員に帰っていきます。」
白藤隆之介(前はらいん代表、2013年度卒、経営学)

「黒田さんは『飯沼佐村の力』であり続け、若い学生には『人が人に向き合うとはどういうことか』インスパイアする存在でした。命が尽きる最後の夏まで中大生を可愛がり対峙してくださったこと、感謝します。」
中澤秀雄(法学部教授)

2014冬号

Close up 【被災地レポート】
2011.3.11

復興支援 宮城県女川町 かまぼこ会社 インターン体験記



女川町

仙台市

宮城県牡鹿郡女川町にある、かまぼこ製造会社「高政」で、復興大学（別冊参照）が主催するプログラム「復興支援インターン（就業体験）」に参加した。大学2年、夏休みの出来事だ。

学生記者 中村亮士（商学部2年）

初日は石巻市や女川町を見て回り、2日～5日までが企業でのインターン。最終日は報告会。他大学の学生を含めた参加者全員で、それぞれの企業を訪問した内容、感想を発表する。

お世話になった高政は、1937（昭和12）年に創業された女川町唯一の企業である。東日本大震災で、町は地震と津波により壊滅的な被害を受けた。被害を最小限に食い止

めた同社は、震災直後から町の司令塔としての役割を果たした。インターンでは、復興を目指す高橋正典社長や多くの社員に、町や会社への思いを詳しく聞かせていただいた。実際の作業の体験、工場内の見学、魚市場へも同行させてもらった。忙しい最中、時間を割いてくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいだった。

印象に残ったのは、高政が地域貢献を重視していることである。購入した放射能測定器を周辺企業に貸し出し、震災直後は避難所にかまぼこを毎日届けた。

「目先の利益ばかりを重視していると足元をすくわれる」「私たちは女川町に生かされている」という言葉を強く受け止めた。企業が持続するために必要なのは、利益だけではなくと学んだ。

● 大学内での、このインターンに関する報告会のこと、説明すべきことが抜けていたり、言いたいことが言葉で表現できなかったり、納得できる内容ではなかった。私の反

省点である。

人前で発表する、伝えることは容易ではない。現場で学んだことを整理して発信できれば意味がないことを痛感した。

今回学んだことを自分の糧とし、反省すべき点は反省して、私自身の成長につなげていきたい。

そもそもインターンシップとは、端的に言えば「就業体験」である。では「働く」とはどのようなことか。高橋社長が話してくれた。

「働くことは喜びに繋がる。つまらないと思って仕事をしても感動は生まれない」

数年後、私は社会に出て働く、仕事を面白いと思い、感動を生み出せる社会人を目標したい。

■復興大学

人材育成、市民生活の質の向上、地域の発展などを目的とし、加盟する大学間や大学と市民・企業・行政などと連携した取り組みを推進する機関。学際総合プラットフォーム（協会、連合）と併発、被災地の高等教育機関や県内の自治体などと協力して、地域に貢献できる人材を育成することで、大震災からの復興に寄与する。



インターン最終日の報告会で使用した報告板

中央大学英字新聞




草のみどり

2014年12月号 (281号)

**ボランティアセンターから
石巻・女川で復興支援に参加！
水産加工会社へのインターンで**



震災の風化を防ぐために

田村 恒介 (前手巻産直東北高校 経済学部公共・環境経済学科三年)

私はあの日、日本水産加工会社で、被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。

震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。



安定した利益を得て、職場を作りたいたい」と。同僚の加工品は「ホタテの貝殻がオパール漬け」「このやわらかさ」「あんなうまい」と。宮城県水産加工水産部長は「被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。」

被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。

被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。

ボランティアの動き

このインターンの体験を通して「ボランティアの体感を通して」

被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。

被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。

地域経済の知識も必要に

平澤 菜由 (前奈良県宇治高等学校)

被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。

被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。

高城町の復興支援

高城町の復興支援に参加した。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。

被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。

被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。

女川町 世代交代

女川町の世代交代に参加した。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。

被災地へ行って、ボランティア活動をした。震災から三年半が経ち、もうすぐ三年半が経ち、被災地へ行って、ボランティア活動をした。

2015年1月号(282号)



岩手県宮古市で多彩な活動

被災地支援学生団体「はまぎくのつばみ」代表 佐藤 耕太 (私立八王子学園八王子高校)



はまぎくのつばみメンバー

ボランティアを始めたきっかけ... 被災地支援学生団体「はまぎくのつばみ」...

そのあとの活動... 被災地支援学生団体「はまぎくのつばみ」...



被災地支援学生団体

町で、未来を背負う... 被災地支援学生団体「はまぎくのつばみ」...

いかに... 被災地支援学生団体「はまぎくのつばみ」...

インタビューを通じて... 被災地支援学生団体「はまぎくのつばみ」...



子どもたちと遊

「はまぎくのつばみ」は、大... 被災地支援学生団体「はまぎくのつばみ」...

いかに... 被災地支援学生団体「はまぎくのつばみ」...



被災地支援学生団体

被災地支援学生団体「はまぎくのつばみ」...

被災地支援学生団体「はまぎくのつばみ」...

被災地支援学生団体「はまぎくのつばみ」...

2. 新聞記事・広報誌等

三陸新報 2014/8/16



信頼積み重ねて3年

中央大ボランティア
仮設訪問や学習支援など

「積み重ねてきた信頼が、被災地での活動を支えている」と、中央大ボランティアの代表者。被災地での活動は、仮設訪問や学習支援など、被災者の生活を支えるための活動を行っている。3年間の活動を通じて、被災者との信頼関係を築き上げてきた。ボランティアの活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。

被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。

三陸新報 2014/11/18

中央大学 被災地支援活動報告

面瀬学習支援

宮城 汐里

被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。



被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。

三陸新報 2014/11/20

中央大学 被災地支援活動報告

面瀬学習支援

宮城 汐里

被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。



被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。被災地での活動は、被災者の生活を支えるだけでなく、被災者の心を癒す役割も果たしている。

三陸新報 2014/11/22

中央大学 被災地支援「はまらいんや」

被災地支援「はまらいんや」

手塚 文裕



被災地支援「はまらいんや」

三陸新報 2014/11/25

中央大学 被災地支援「はまらいんや」

被災地支援「はまらいんや」

手塚 文裕



被災地支援「はまらいんや」

三陸新報 2014/11/28

中央大学 チーム次元

チーム次元

佐藤 公美



チーム次元

三陸新報 2014/11/29

中央大学 チーム次元

チーム次元

佐藤 公美



チーム次元

産経新聞 2014/9/5

読売新聞 2014/4/13



産経新聞の記事のスクリーンショット。左側には折れ線グラフがあり、右側には人物の写真と記事本文が掲載されている。



読売新聞の記事のスクリーンショット。中央には「たまは」というロゴがあり、右側には「被災地と学生つなぎ役」という大きな見出しがある。写真には松本真理子さんが写っている。

8月14日に中央大学のしもんとホール（八王子市）で、同大ボランティアセンター（V.C.）創立1周年記念シンポジウムを開催する。中央大学ボランティアセンターは、4年以内の卒業生約100名で、志望の中央大学の学生とともに「ボランティア入カレッジ」を開催。同大が被災地支援活動の中心として活動している。同大V.C.（042-703-3437）。

被災地支援活動、被災地支援活動の中心として活動している。同大V.C.（042-703-3437）。

被災地支援活動、被災地支援活動の中心として活動している。同大V.C.（042-703-3437）。

被災地と学生つなぎ役



中央大学ボランティア
コーディネーター
松本 真理子さん 32

被災地支援活動、被災地支援活動の中心として活動している。同大V.C.（042-703-3437）。

被災地支援活動、被災地支援活動の中心として活動している。同大V.C.（042-703-3437）。

被災地支援活動、被災地支援活動の中心として活動している。同大V.C.（042-703-3437）。

被災地支援活動、被災地支援活動の中心として活動している。同大V.C.（042-703-3437）。

被災地支援活動、被災地支援活動の中心として活動している。同大V.C.（042-703-3437）。

3. メディア放送

(1) テレビ放送

年 月 日	放送局／番組名	内 容
2014年6月14、15日	MYJ:COM ／ウィークリーニュースひの	ボランティアセンター1周年記念 シンポジウム
2014年8月30日、31日	MYJ:COM ／ウィークリーニュースひの	地域防災講座「DIG」
2014年11月10日	MYJ:COM ／デイリーひの	地域防災講座「HUG」
2014年11月15日、16日	MYJ:COM ／ウィークリーニュースひの	地域防災講座「HUG」
2014年11月15日、16日	MYJ:COM ／ウィークリーニュースひの	減災ウォークラリー
2015年2月26日、 3月5日、10日	MYJ:COM ／デイリーひの	大学生ボランティアパネル展 @イオン多摩平の森
2015年3月7日、8日、 14日、15日	MYJ:COM ／ウィークリーニュースひの	大学生ボランティアパネル展 @イオン多摩平の森

(2) ラジオ放送

年 月 日	放送局／番組名	内 容
2015年2月24日	仙台シティエフエムラジオ3	国連防災世界会議での復興支援イン ターンの報告
2015年2月26日	NHK仙台／ゴジだっちゃ!	中央大学の被災地支援の取り組み紹介
2015年3月14日	K-MIX (FM 静岡) ／サタデーモーニングロミロミ	チーム女川の活動

14. 作成物掲載

1. 刊行物

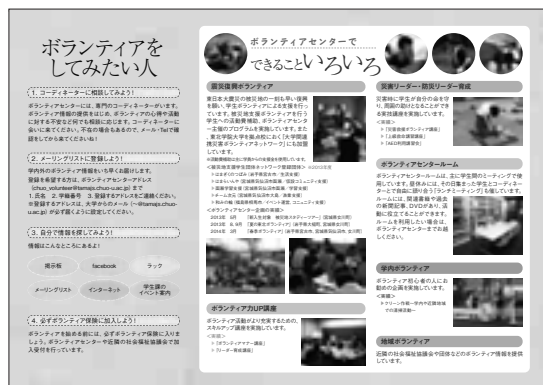
2013年度ボランティアセンター報告書



2014年度被災地支援ネットワーク学生団体紹介冊子



ボランティアセンターリーフレット



2. ポスター・チラシ

中央大学ボランティアセンター1周年記念シンポジウム

中央大学ボランティアセンター設立1周年記念シンポジウム

学生だって地域のカ

参加費 無料

～災害支援から日常の支え合いへ、
学生ボランティアの力とわがまちの防災力UP～

2014年6月14日[土]
13:00～16:30
中央大学 9号館 クレセントホールにて

＜1部＞基調講演
＜2部＞パネルディスカッション

地域のみならず
2013年4月1日、中央大学に「ボランティアセンター」が開設されました。
ボランティアセンターの使命の1つは、
学生ボランティアを輩出して地域のみならずわがまちを元気にすることです。
そこで設立1周年を記念して、地域のみならず一緒に、
学生ボランティアの力をわがまちの力に生かす方法を、見えてみる場を開いてみることにしました。
ひとりで多くの方にお会いし、「わがまち」を楽しく盛り合わせることができれば幸いです。
中央大学ボランティアセンターより

被災地スタディーツアー

新入生のための被災地スタディーツアー

被災地の今を知ろう

募集人数 25名

5月23日(金)～25日(日)
2泊3日(※1日目バス車中泊)

＜行き先＞ 宮城県女川町 ※死に者行方不明者率、住居倒壊率が被災地内最大の町
＜宿泊＞ エル・ファロ (2泊目)
＜参加費＞ 7,000円+期間中の食費等(25日朝食以外は実費) ※予定
＜交通手段＞ 貸切バス 中央大学多摩キャンパス ⇄ 女川
＜集合＞ 5月23日(金) 21:00 中央大学11号館前集合

★参加条件★
・本学部学生(新入生を優先しますが、2年生以上もエントリーを受け付けます。)
・事前研修・事後研修に必ず出席できる方 ※日程は後日、参加者へお知らせします。
・「保証人の承諾書」が提出できる方
・ボランティア保険に加入すること

★エントリー方法★

STEP 1 《事前説明会》に参加
◎多摩キャンパス 4月18日(金) 12:40～ 6号館2階 6203教室
◎後楽園キャンパス 4月17日(木) 12:15～ 5号館1階 5138教室

STEP 2 《エントリー》【4月28日(月)17:00〆迄】
下記書類をボランティアステーションへ提出。
・エントリーシート(説明会、学生課、webにて)
・履歴登録のチェックリスト(C plusで)

STEP 3 《選考結果発表》4月30日(水) 12:00 掲示板・Web・Facebookで発表

【主催・問い合わせ】 中央大学学生ボランティアセンター(多摩キャンパス6号館地下1階) TEL 042-674-3487
公式web http://www.chuo-u.ac.jp/chuo-u/volunteer/index_j.html facebook <http://on.fb.me/10L23Xe>

ボランティア写真展2014

中央大学ボランティアセンター主催

ボランティア写真展2014

【活動報告会】
今年の夏に被災地支援に行った学生による報告会を開催いたします。

＜実施日＞ ※各日12:40～13:10
10/21(水) チーム女川(女川町)、チーム次元(気仙沼市大島)
10/23(木) はまらいいんや(気仙沼市)、面瀬学習支援(気仙沼市)
10/24(金) 石巻女川復興支援インターン、はまぎくのつぼみ(宮古市)

10/21～28

10:00～17:00 ※21日14時～、28日13時まで

中央図書館1階展示スペース
(中央大学多摩キャンパス図書館)

【問合せ】
中央大学ボランティアセンター
東京都八王子市東中野7-42-1 6号館地下1階 学生課内
TEL 042-674-3487 FAX 042-674-3469
©アソセス 多摩モビル 中央大学・明星大学駅直結

東日本大震災被災地支援大学生ボランティアパネル展

中央大学
明星大学
東京薬科大学
実践女子大学

東日本大震災被災地支援 大学生ボランティア 活動報告パネル展

日野市ボランティアセンター

JR豊田駅北口より徒歩3分

3月5日(木)～3月11日(水)
イオンモール多摩平の森 3階エスカレーター脇

必見!

お知らせ
被災地支援活動報告会
地域防災力UPイベント
(避難所運営ゲーム)
五小避難所運営
マニュアル発表
(五小防災会より発表)

日時 3月8日(日)
13時30分～15時30分
イオンホール(3階)
参加無料
事前申込不要

問い合わせ先
中央大学ボランティアセンター 042-674-3487 (平日9時～17時)

2014年度 中央大学ボランティアセンター報告書

発行	2015年5月1日
発行者	中央大学ボランティアセンター 〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 Tel: 042-674-3487 Fax: 042-674-3469 E-mail: chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp http://www.chuo-u.ac.jp/usr/volunteer/
印刷	明誠企画株式会社



発行日 2015年5月1日

発行者 中央大学ボランティアセンター